秋田県文化財調査報告書第174集

遺跡詳細分布調査報告書

1988・3

秋田県教育委員会

遺跡詳細分布調査報告書

1988・3

秋田県教育委員会

序

本県では近年高速交通体系の整備や関連する地方主要道の建設事業をはじめとする地域開発が進行しております。これらの開発行為と埋蔵文化財保護の基礎資料となるのが遺跡分布調査、遺跡範囲確認調査であります。

本報告書は、昭和62年度国庫補助事業として実施した、東北横断自動車道秋田線建設事業（山内村・横手市）、高速交通関連道路工事（河辺町）の遺跡分布調査と土壌汚染特別対策事業（羽後町）、東北横断自動車道秋田線建設事業（西仙北町）、国道103号バイパス建設事業（大館市）、高速交通関連道路整備事業（小坂町）、西山地区農免農道整備事業（鹿角市）の遺跡範囲確認調査の結果をまとめたものです。これらの遺跡は開発事業が具体的に計画されている区域内にあるため、埋蔵文化財保護の立場で適切に対処したいと考えております。

最後になりましたが、これらの調査に多大のご協力いただきました関係各機関に心から感謝を申し上げるとともに、今後共埋蔵文化財の保護につきましてご協力賜わりますようお願い申し上げます。

昭和63年3月

秋田県教育委員会

教育長　斎　藤　　長

例　　言

1　本書は、昭和62年度に秋田県教育委員会が国庫補助を得て実施した、遺跡分布調査と遺跡範囲確認調査の報告書である。

2　本書に掲載の遺跡分布調査・遺跡範囲確認調査は、秋田県教育庁文化課・秋田県埋蔵文化財センターと羽後町教育委員会の職員が担当した。報文は各担当者が作成したものをそのまま掲載したもので、編集は秋田県埋蔵文化財センターが行った。

3　昭和59年度から実施している市町村単位の遺跡分布調査は、本年度南秋田郡と山本郡内の15箇町村で行われた。その成果は後日、遺跡地図として刊行の予定であるため、本書には収録しなかった。今年度は秋田県遺跡地図（県南版）として３分冊の１冊を刊行した。

4　遺跡分布調査のうち、東北横断自動車道秋田線（湯田町・横手市間）の分布調査は、山内村・横手市の路線内を実施したが、一部不確実なところがあるため、次年度試掘調査を実施して、その結果とあわせて報告する。高速交通関連道路工事の分布調査は、河辺町の路線内について実施したが、調査の結果、遺構その他を確認できず、本報告から除外した。

5　範囲確認調査のうち、用野目川向Ⅱ遺跡、堤沢Ⅰ遺跡、堤沢Ⅱ遺跡、山館跡は調査の結果遺構その他を確認できず、本報告から除外した。

6　報告に使用した地図は、建設省国土地理院発行の５万分１地形図、秋田県農政部平鹿農林事務所、同土木部北秋田土木事務所、同土木部道路課作成の1000分の１の地図、及び秋田県農政部鹿角農林事務所作成の500分の１の地図である。

目　　次

序

例　言

第１章　はじめに …… 1

第２章　昭和62年度遺跡分布調査・範囲確認調査実施要項 …… 1

第１節　遺跡分布調査 …… 1

第２節　遺跡範囲確認調査 …… 2

第３章　調査の記録 …… 5

第１節　遺跡範囲確認調査 …… 5

1　土壌汚染特別対策事業 …… 5

馬場野遺跡

2　国道103号バイパス建設事業 …… 13

山王岱遺跡

3　高速交通関連道路整備事業（小坂インター） …… 19

はりま館遺跡

4　西山地区農免農道整備事業 …… 39

用野目川向Ⅲ遺跡

第1章　は　じ　め　に

国庫補助を得て実施した昭和62年度の遺跡詳細分布調査は、東北横断自動車道秋田線建設事業（湯田町・横手市間）、高速交通関連工事および土壌汚染特別対策事業、東北横断自動車道秋田線（横手市・秋田市間）、国道103号バイパス建設事業、高速交通関連道路整備事業（小坂インター）、西山地区農免農道整備事業に係る遺跡の範囲確認調査である。これらの調査は既に策定してある調査実施要項に基づいて秋田県教育庁文化課、秋田県埋蔵文化財センター職員等が昭和62年４月から11月にかけて実施したものである。

第２章　昭和62年度遺跡分布・範囲確認調査実施要項

第１節　遺跡分布調査

1　調査の目的

開発予定地域内を踏査して遺跡の有無を確認し、遺跡の保護策を講ずる。

2　調査の方法

(1)　計画地域の範囲内で遺物の表面採集及び試掘調査を実施して、遺跡の所在を確認する。

(2)　調査の期間はおおむね１～５日間とし、地元の人々の遺跡についての情報を活用する。

(3)　確認された遺跡を地図へ記入するなどの記録は、必ず現場で行う。

(4)　遺跡の現況・遠景は必ず写真撮影をする。同時に遺跡に至る経路・目標を詳しく記録し、はじめての人でも迷わず現場に到着できるようにする。

(5)　散布している遺物と立地を手がかりに、できるだけ遺跡の時代や性格を判定するよう努力する。

(6)　使用する地図は５万分の１地形図と、開発部局で作成した図面とする。

3　調査主体者

秋田県教育委員会

4　調査担当者

秋田県教育庁文化課　　学芸主事　　冨樫泰時

秋田県埋蔵文化財センター　　文化財主事　　児玉　準

5　事業名・調査対象地域・調査期間ほか

事業名及び調査対象地域	調査期間及び期日	備　　考
東北横断自動車道秋田線建設事業(湯田町・横手市間)〔山内村・横手市〕	昭和62年５月14日～５月15日	昭和63年度報告の予定
高速交通関連道路工事〔河辺町〕	昭和62年11月６日	路線内は、遺構その他を確認できなかった。

第２節　遺跡範囲確認調査

1　調査の目的

開発事業計画に係る遺跡の範囲確認調査を実施して埋蔵文化財の保護と保存を図る。

2　調査方法

(1)　遺跡の広がり、埋没の度合い、時代とその性格を知るために、当該地域で遺物の表面採集及び小規模の発掘調査（遺構確認面までの掘り下げ）を行う。

(2)　調査の期間をおおむね２～12日間とし、その期間内にできるかぎり面的に発掘調査を広げて遺構の確認に努める。

(3)　確認された遺構、遺物、堆積土の厚さ、遺物包含層などの記録は現場で行う。その際遺跡の全景と発掘調査状況、確認された遺構・遺物などは必ず写真撮影する。

(4)　使用する地形図は開発部局で作成した一番大きな縮尺図面とし、新規に測量などは行わない。

(5)　遺跡の立地条件などに即した適切な調査をする。

3　調査主体者

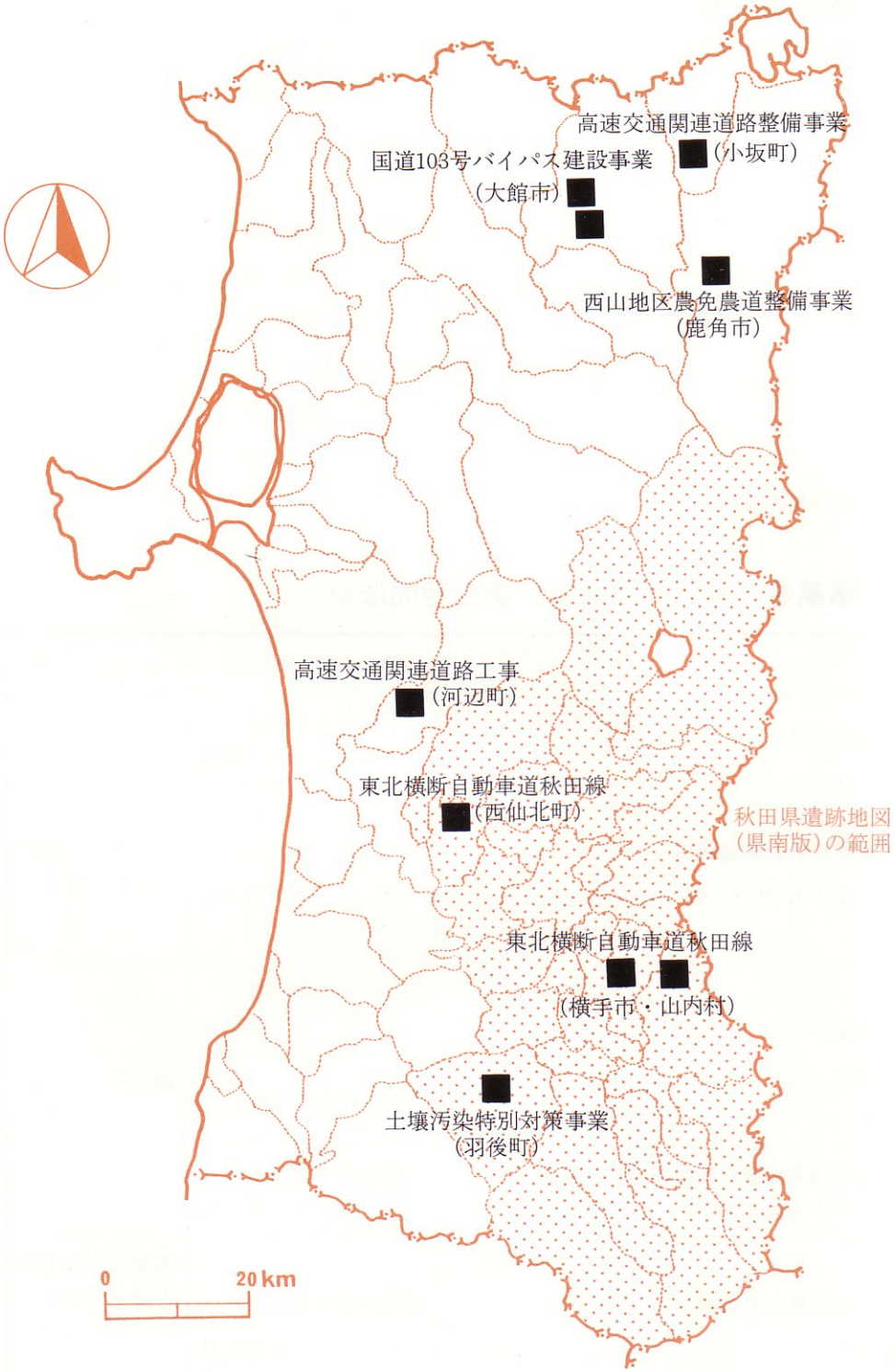
秋田県教育委員会

4　調査担当者

秋田県教育庁文化課	学芸主事	冨樫泰時
秋田県埋蔵文化財センター	学芸主事	船木義勝
		大野憲司
		栄　一郎
		利部　修
		谷地　薫
		武藤祐浩
	文化財主任	桜田　隆
	文化財主事	高橋忠彦
		栗沢光男
羽後町教育委員会	社会教育係長	鈴木俊男

5　事業名・調査対象遺跡・調査期間ほか

事業名	遺跡名(遺跡No.)及び所在地	調査期間	摘要
土壌汚染特別対策事業	馬場野遺跡〔羽後町〕	昭和62年４月21日～４月28日	
東北横断自動車道秋田線（横手市・秋田市間）	堤沢Ⅰ遺跡（No.23）〔西仙北町〕	昭和62年７月６日～７月８日	調査区内は遺跡と認定できず
	堤沢Ⅱ遺跡（No.24）〔西仙北町〕		
国道103号バイパス建設事業	山王岱遺跡〔大館市〕	昭和62年７月15日～７月17日	
	山館跡〔大館市〕	昭和62年10月９日	調査区内は遺跡と認定できず
高速交通関連道路整備事業（小坂インター）	はりま館遺跡〔小坂町〕	昭和62年８月24日～９月５日	
西山地区農免農道整備事業	用野目川向Ⅱ遺跡〔鹿角市〕	昭和62年９月１日～９月４日	調査区内は遺跡と認定できず
	用野目川向Ⅲ遺跡〔鹿角市〕		



第１図　遺跡分布・遺跡範囲確認調査位置図

第3章　調　査　の　記　録

第1節　遺跡範囲確認調査

1　土壌汚染特別対策事業

馬場野（ばばの）遺跡

1　**所在地**　雄勝郡羽後町林崎字馬場野5他

2　**工事区域内遺跡面積**　2,000m²

3　**調査期間**　昭和62年4月21日～4月28日

4　**調査担当者**　冨樫泰時・鈴木俊男

5　**遺跡の立地と現況**

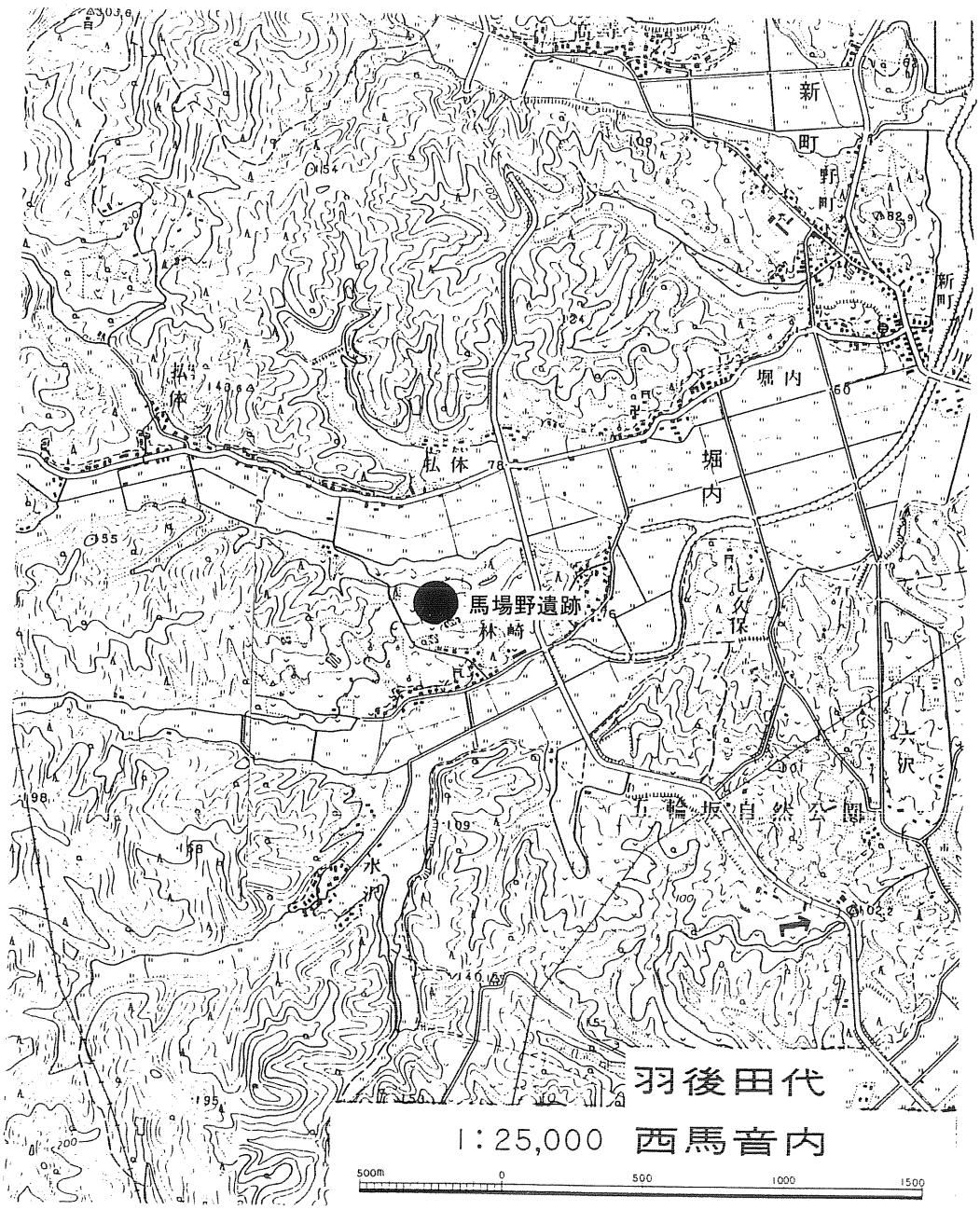
遺跡は出羽丘陵の東裾、標高100m前後の丘陵上に位置している。この丘陵は東側に舌状にのびたもので、頂上は標高96m～110m、裾は85m前後で、遺跡の所在するところでの幅はおよそ200mほどで平坦面はなくすべて傾斜地である。遺跡のある西側は山林、東側にも一部山林が存在するが大部分は畑地である。南側の裾には鶏舎が建ち、丘陵部も大きく削りとられている。遺跡の東約250mのところには丘陵を切って南北に農免農道が走っている。この舌状丘陵の南および北側には水田が開け、西側の山岳部から流れ出る沢は丘陵の東で合流し新町川となって北に流れ雄物川にそそいでいる。

6　**範囲・時代・性格**

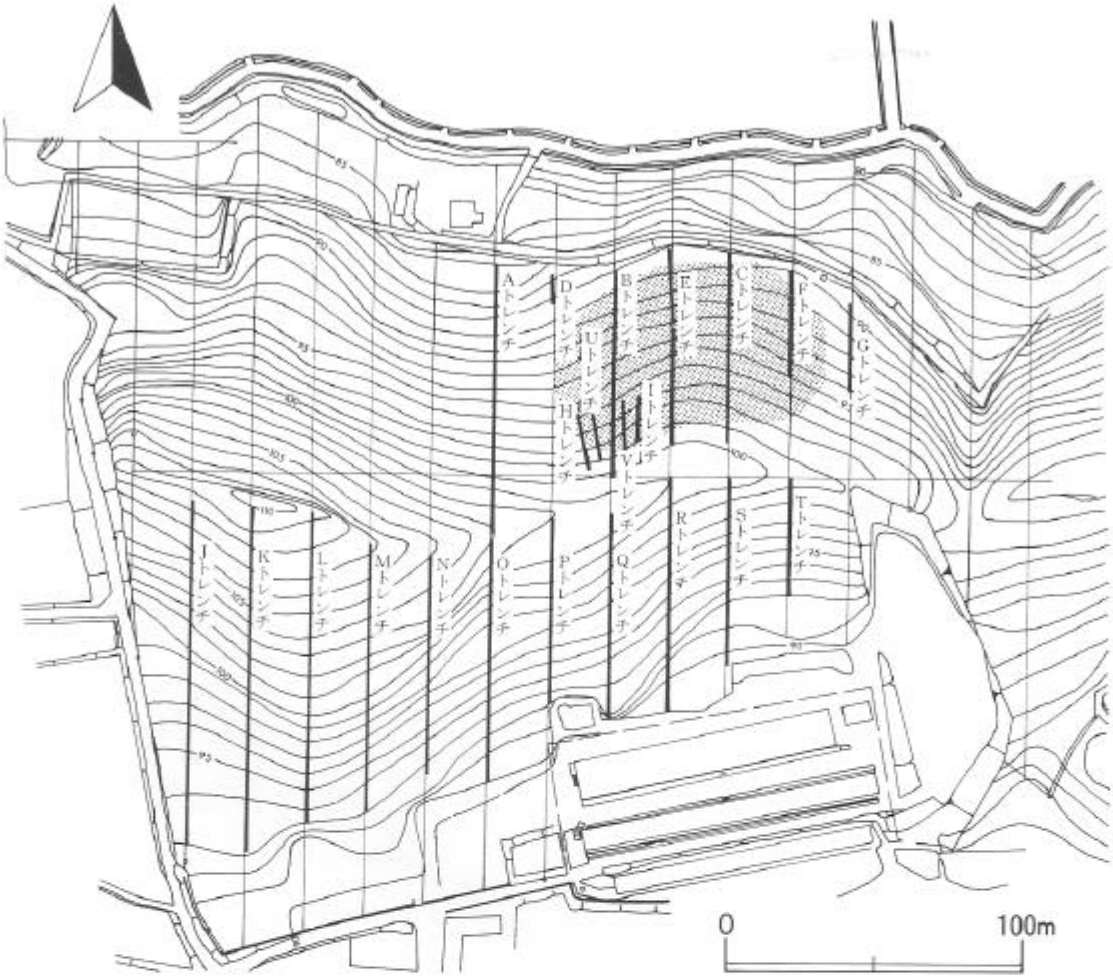
畑地になっている遺跡を踏査した結果、全域から少量の土器片、石器片が採集できたため第3図のように頂上から南北に幅1mのトレンチを設定して調査を実施した。その結果、南側のトレンチからは遺構、遺物包含層は確認されず、また遺物包含層と考えられる黒土層はほとんどない状態であった。北側は早くから畑地として耕作されていたらしく、丘陵の裾では畑の跡と思われるテラスがいくつか確認された。遺構と思われるものはCトレンチで一箇所確認（土坑？）されただけであった。

遺物は北側に設定した11本のトレンチからパラパラ出土する程度であった。その中でもBトレンチを中心にその両側（H～Iトレンチ）で少し集中していたが遺構は確認できなかった。出土、採集した遺物は図・写真で示したように縄文時代前期（大木2b式）の土器と石器である。土器は⅔程度復原できた。大きさは口径19cm、現高23cmの深鉢形のもので

ある。口縁は平で、文様は口縁に平行に綾絡文が胴部下半まで施されている。胎土には5㎜程の砂粒を含み、器表面はザラザラしている。石器は磨製石斧、凹石、磨石、石鏃（全て無柄）、石匙（全て縦長）、石箆、石槍などである。このようなことから遺跡は遺物包含層がほんの少し残存する程度のものと思われる。

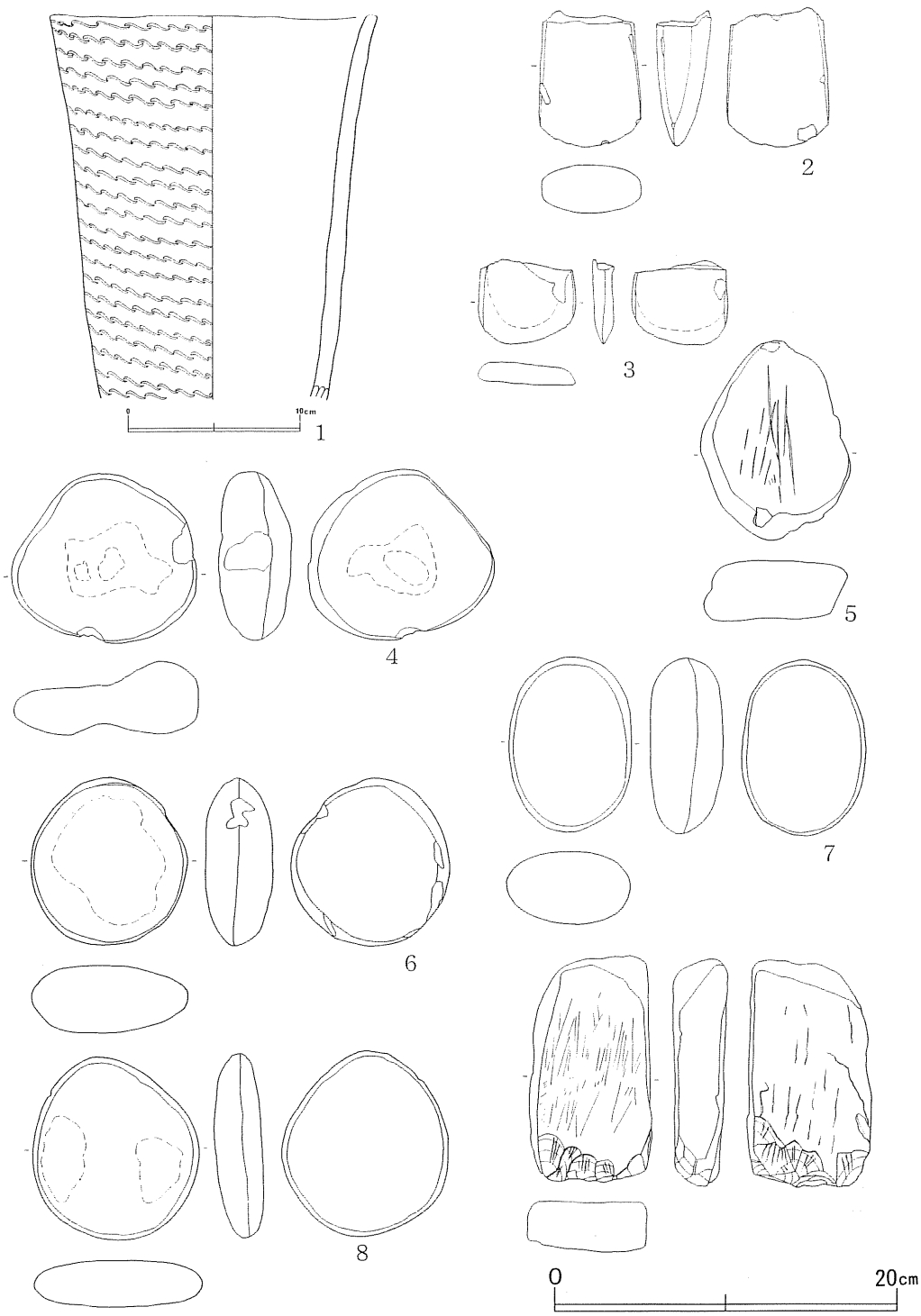


第２図　馬場野遺跡位置図

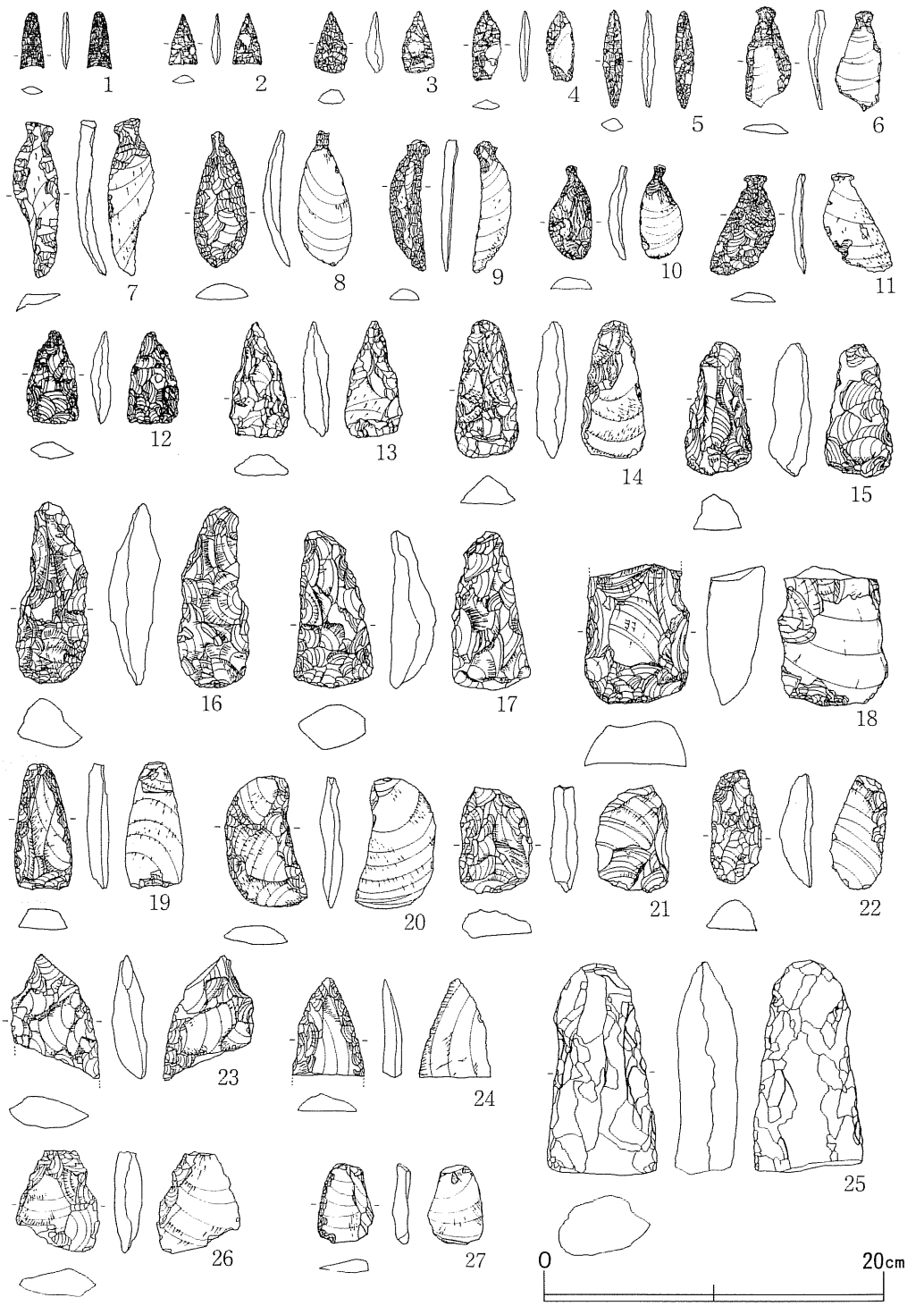


第３図　馬場野遺跡範囲図

第４図　馬場野遺跡　遺跡遠景　（北►南）



第５図　馬場野遺跡　出土遺物



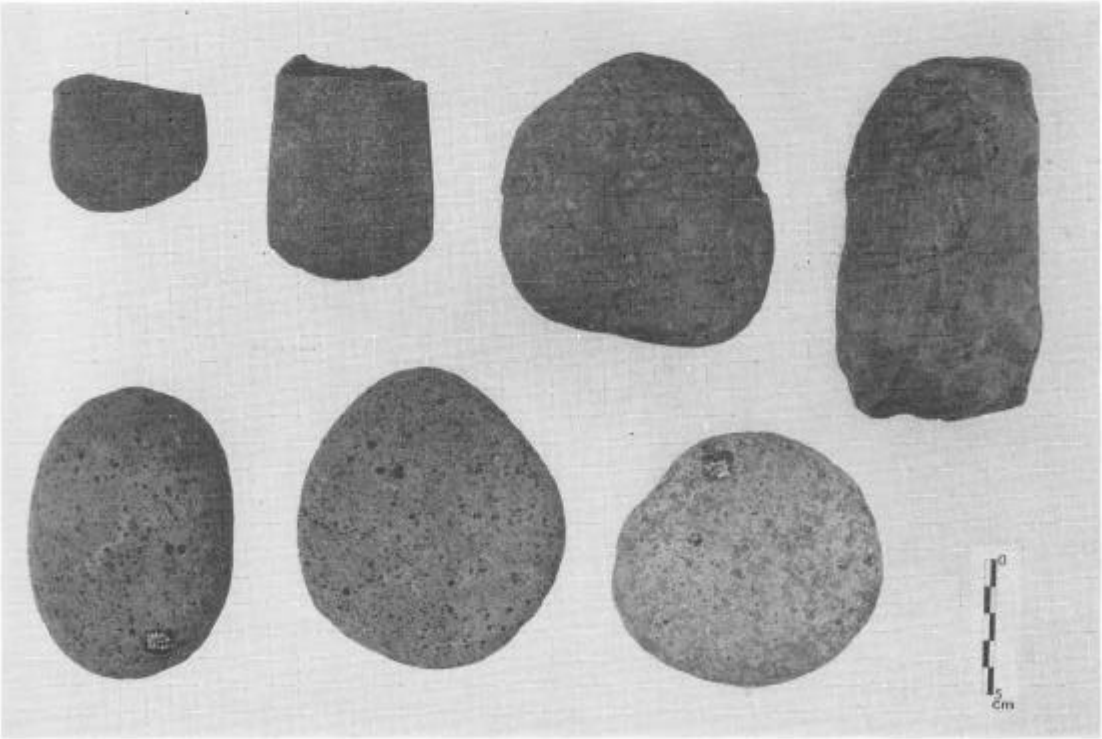
第６図　馬場野遺跡　出土遺物

図版1

馬場野遺跡　Ｂトレンチ　（南►北）

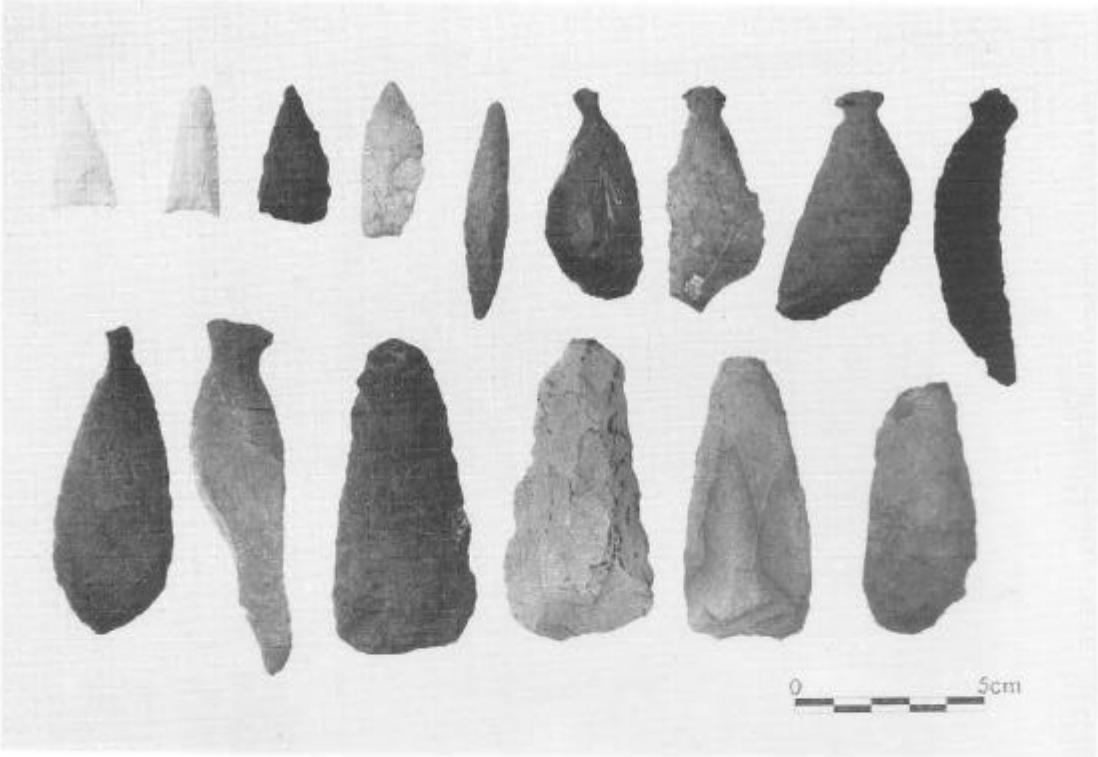
馬場野遺跡　Ｈトレンチ・撹乱状況（畑地）（東►西）

馬場野遺跡　出土遺物

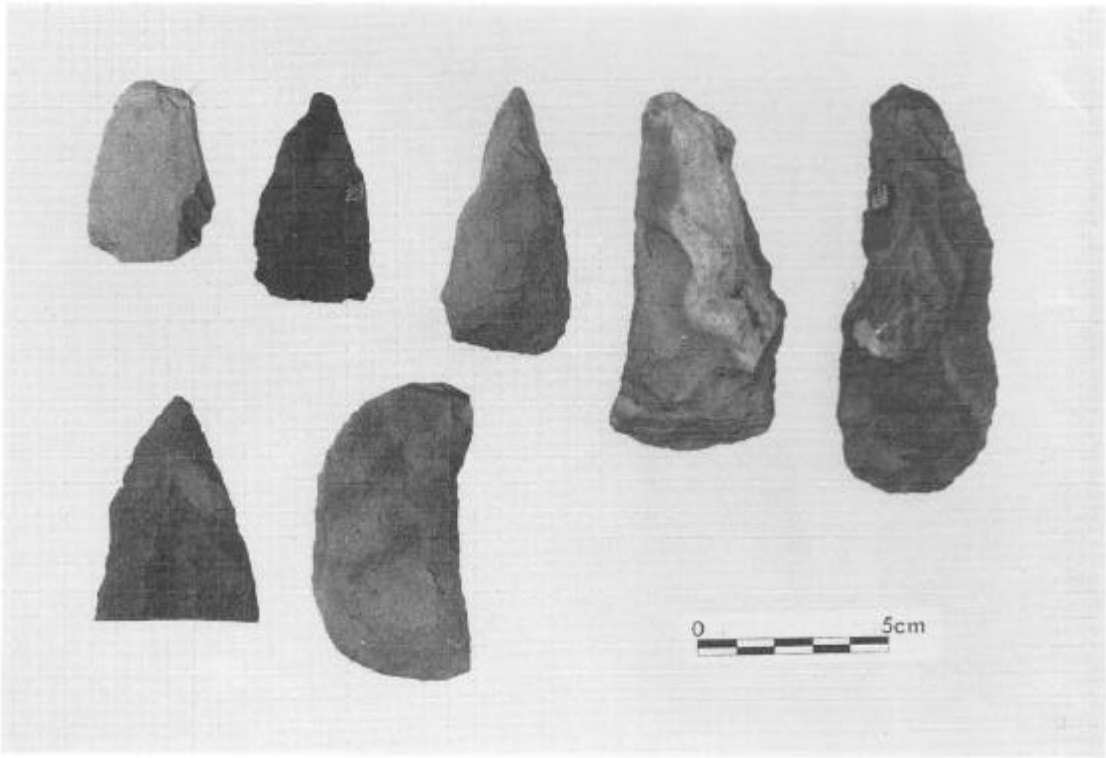


馬場野遺跡　出土遺物

図版3



馬場野遺跡　出土遺物



馬場野遺跡　出土遺物

2　国道103号バイパス建設事業

山王岱（さんのうたい）遺跡

1　**所在地**　大館市餌釣字山王岱８－１他

2　**工事区域内遺跡面積**　4,000㎡

3　**調査期間**　昭和62年７月15日～７月17日

4　**調査担当者**　大野憲司

5　**遺跡の立地と現況**

遺跡は大館市街地の南東側に広がる標高70～80ｍの台地群のうち最も南の台地上に立地し、沖積地との比高は10～15ｍである。この台地の東側は餌釣沢によって開析され、西側は池内方面に続く沖積地となり、平面的には前記台地群から南に突き出た半島状を呈し、今回の調査地はその付け根の部分にあたる。昭和62年５月６日から同年７月14日までは調査対象区の東側半分を調査し、縄文時代、平安時代、中世に属すると考えられる各遺構を検出した。今回の範囲確認調査地は畑地と山林（杉）である。

6　**範囲・時代・性格**

『秋田県の中世城館』に示された餌釣館の範囲は、日吉神社を囲む一辺約30～50ｍの略方形を呈した形となっている。しかし昭和62年度の発掘調査及び範囲確認調査の結果では空堀が上記した餌釣館の北～東側にも存在し、これに地形を考慮すると本来の館は、頂点を南にする略二等辺三角形を呈する形になるものと考えられる。二等辺三角形の高さ（南北）は約 400 ｍ、底辺の長さ（東西）は 170 ～ 270 ｍと広大である。今回の範囲確認調査は、館の北辺を限る東西方向の空堀とその南、北側を調査した。この空堀は、現況で上面幅約９ｍ、下面幅約７ｍ、深さ 0.6 ｍの規模を持つもので、調査の結果は第９図の断面図のとおり下面幅は約４ｍ、深さ 1.5 ｍとなり、堀の両側は若干ではあるが土塁状の高まりとなっている。

Ａ・Ｂ・Ｃトレンチは、空堀の外側に当る部分であるが、縄文時代（中期）の土器、石器、平安～中世と考えられる溝、柱穴（径30～40㎝）などがまばらではあるが出土、検出された。Ｄトレンチは空堀部分である。Ｅトレンチからは回転糸切り痕を持つ土師器が出土した。

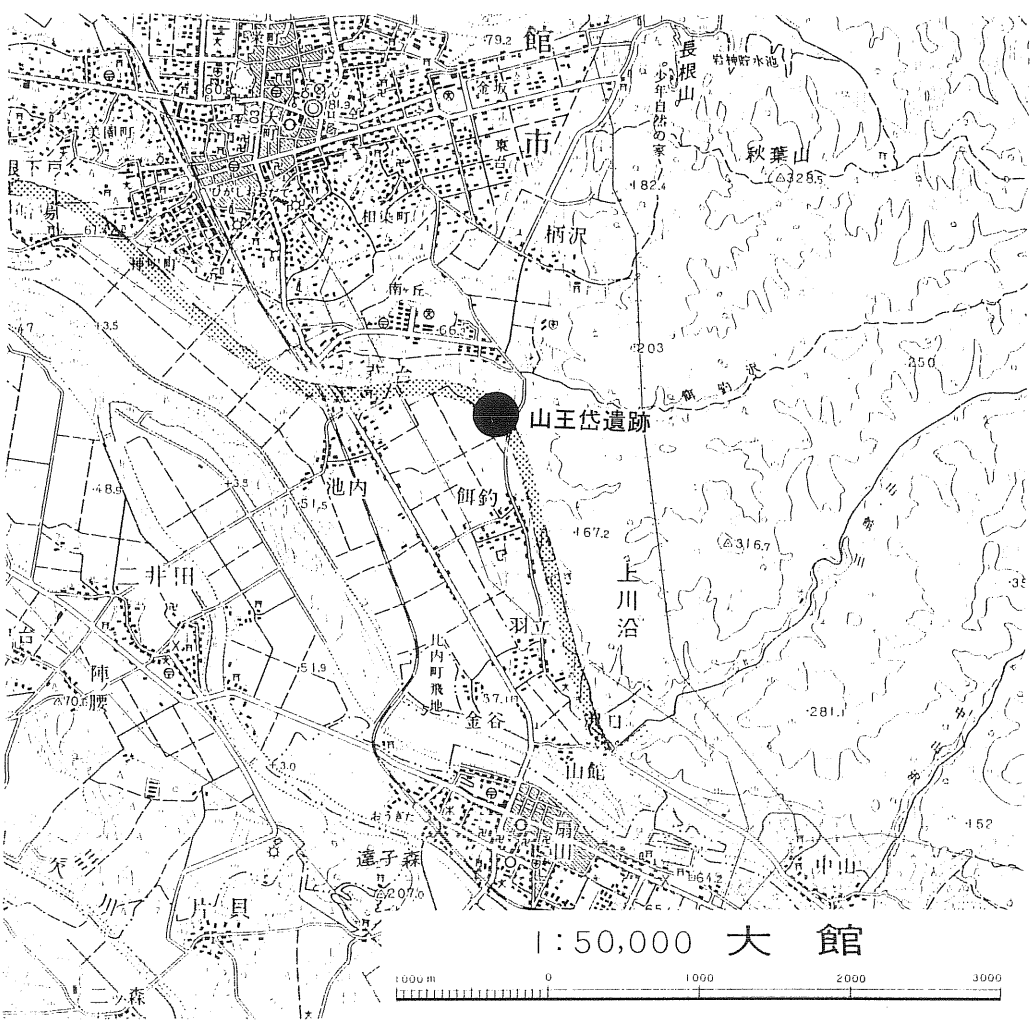
以上の結果から本遺跡は、縄文・平安・中世にまたがる遺跡と考えられる。

7　**土層**

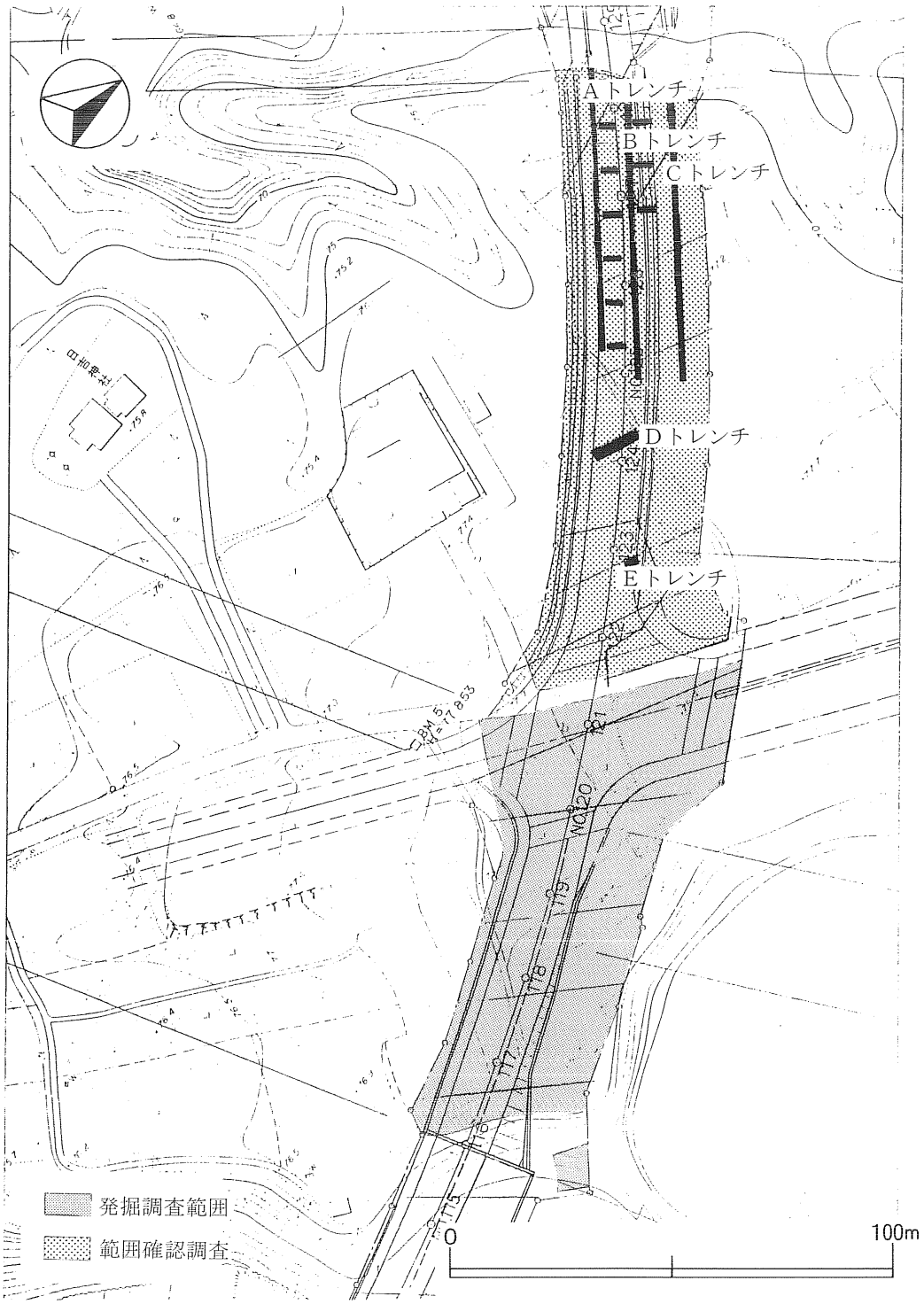
Ａ・Ｂ・Ｃトレンチの東半部分では、第Ⅰ層黒褐色土（約20㎝）、第Ⅱ層黒色土（約10

～30cm）、第Ⅲ層暗褐色土（約10cm）、第Ⅳ層地山軽石混じりの砂礫層となる。西半部分では西側に行くほど上記第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層がそれぞれ層厚を減じて、西端では現表面から20～30cmで地山に達する。このうち遺物は第Ⅱ層上部が多い。大湯浮石層は部分的に第Ⅰ層直下くらいで観察されるが、そのほとんどは若干のくぼみ部分に二次堆積したものである。Eトレンチでは第Ⅰ層黒褐色土（20～30cm）、第Ⅱ層黒色土（15cm前後）、第Ⅲ層漸移層となっており、遺物は第Ⅱ層上面あたりが多い。

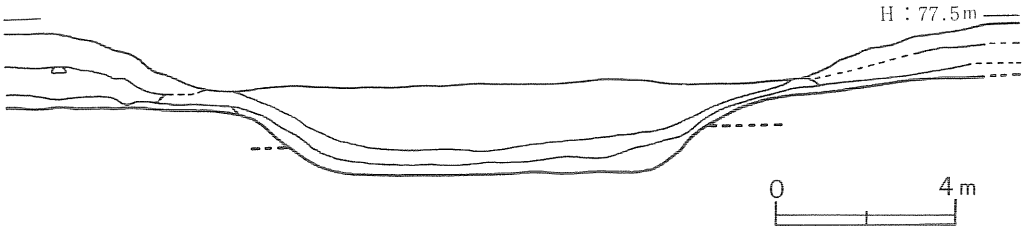
A・B・Cトレンチ部分はかつて杉林であったため、その切株（株径約30cm）が多い。



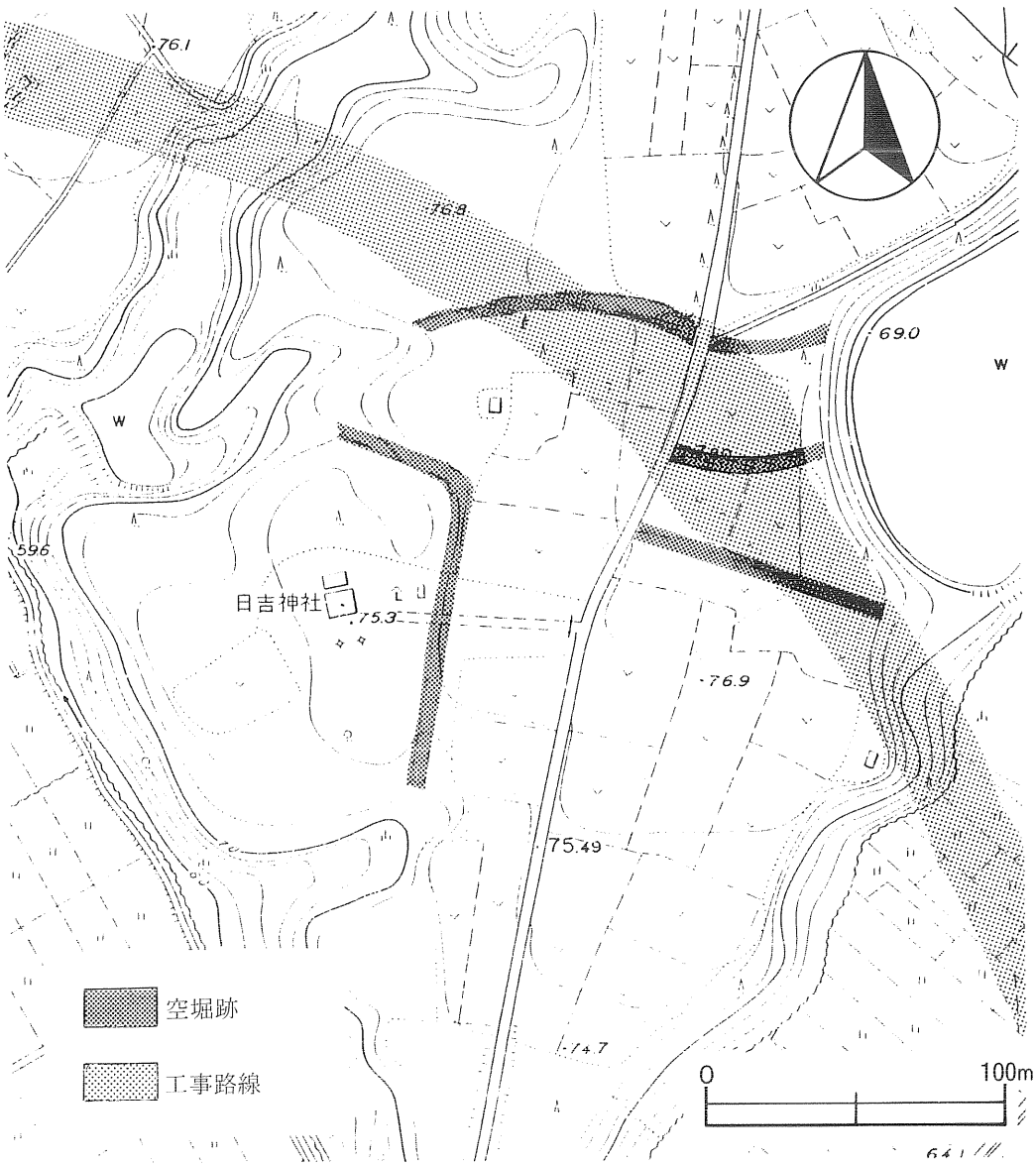
第７図　山王岱遺跡位置図



第８図　山王岱遺跡工事区域内遺跡範囲図



第９図　山王岱遺跡Ｄトレンチ空堀跡西壁土層図



第10図　山王岱遺跡空堀跡

山王岱遺跡　遺跡遠景　（南東►北西）

山王岱遺跡　遺跡近景　（東►西）

山王岱遺跡　Aトレンチ・溝　（東►西）

山王岱遺跡　Eトレンチ・火山灰検出状況　（東►西）

3　高速交通関連事業（小坂インター）

はりま館（だて）遺跡

1　**所在地**　鹿角郡小坂町小坂字下モ上ハ山47－１他

2　**工事区域内遺跡面積**　34,000㎡

3　**調査期間**　昭和62年８月24日～９月５日

4　**調査担当者**　船木義勝・栗沢光男・利部修・栄一郎・武藤祐浩

5　**遺跡の立地と現況**

遺跡は鹿角盆地北端、小坂川右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡が立地する段丘面には南東－北西方向に開析谷が入り込み、標高 200 ～ 227 m の南東に傾斜した舌状台地となっている。本遺跡名の「はりま館」は、両側に開析谷が入り込み独立丘陵状を呈するこの舌状台地先端部の通称によるものである。

現在の遺跡周辺の状況は、台地中央を東北縦貫自動車道が南北に縦断し、その東側は畑地と雑木林および杉林、西側と南側は畑地と雑木林である。

6　**調査の概要**

(1)　遺跡の概観

本遺跡は北西から南東に傾斜する最大幅 400 m 前後を測る舌状台地上に立地する。台地は地形から南東側の標高200～210m 前後の平坦部と台地中央の標高225～227m 前後の最高位部とその周辺の急～緩斜面とに大きく分かれる。前者は既に東北縦貫自動車道建設に先立って、中央部を縦断する形で調査が行われている。その結果、縄文時代前期および中期末～後期初頭の竪穴住居跡や土坑、平安時代の竪穴住居跡などが検出され、さらにこのほかに、各時期の縄文土器や弥生土器なども出土し、多様な内容をもつ遺跡であることが明らかとなっている。

今回の調査においては台地南東部で縄文時代の竪穴住居跡や集石遺構、さらには平安時代の竪穴住居跡などを検出し、先の調査と同様の状況を確認した。一方、台地北西部では縄文時代の焼土遺構や土坑、集石が認められたが、平安時代の遺構は検出できなかった。

以上のことから、現在のところ台地南東部の平坦部に主として縄文時代および平安時代の集落が展開し、台地北西部ではその性格は必ずしも明確ではないが、縄文時代の集落が存在することが考えられる。なお、今回の調査においては中世の館跡の存在を裏付ける遺構・遺物の検出はなかった。

(2)　調査の方法

調査は東北縦貫自動車道を境に東西に台地を二分して行った。比較的平坦で見通しの良い東側には東西方向に20ｍ間隔を基本とする幅１ｍ、長さ６～70ｍのトレンチ20本と、南北方向に幅１ｍ、長さ８～25ｍのトレンチ５本を入れ、計738㎡の試掘調査を行った。比較的傾斜の急な西側には台地中央の最高位部とその周辺の緩斜面に幅１ｍ、長さ２～17ｍのトレンチ52本を入れ、計262㎡の試掘調査を行った。

調査は遺構を検出した場合、その検出面で掘り下げを停止し、その検出状況の記録を作成した。遺構の検出がない場合は縄文時代以降の基盤層である黄褐色土層まで掘り下げ、土層断面の記録を行った。

7　調査の記録

(1)　基本土層

本遺跡の基本土層は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土および耕作土である。層厚は10～40cm前後を測る。台地中央の最高位部では厚さ10cm前後と薄くなっている。

Ⅱ層：黒色土で、一部では浮石粒が混入する。層厚は５～70cm前後で、台地中央の最高位部では薄く、南東側の斜面から平坦部にかけて厚く堆積している。また、北側ではⅢ層と共に本層を欠く地点がある。本層は平安時代の遺物包含層である。

Ⅲ層：大湯浮石層である。層厚10cm前後で、ほぼ調査区全域に堆積する。台地南東側では本層上面で平安時代の遺構が確認される。

Ⅳ層：暗褐色土層で、層厚10cm前後の薄層である。先の調査では弥生時代の遺物包含層に比定されていたが、今回の調査では弥生土器の出土が乏しかったこともあり、本層が該期の遺物包含層であるかは不明瞭である。

Ⅴ層：黒色土層で、層厚20～30cm前後を測る。本層は調査区全域で大きな層厚の変化は認められず、比較的安定した堆積状況を示している。縄文時代の遺物包含層である。

Ⅵ層：基盤層の黄褐色土層への漸移層である。本層上面で縄文時代の遺構が確認できる。

(2)　遺　構

今回検出した遺構は以下のとおりである。

縄文時代竪穴住居跡	1	軒
同　溝	1	条
同　土坑	5	基
同　集石	7	基
同　焼土遺構	2	基
平安時代竪穴住居跡	10	軒

同　溝　　3　条

同　土坑　　2　基

縄文時代の遺構分布は、トレンチのかなりの範囲をII層上面で掘り下げを停止したため、必ずしも明瞭ではない。該期の竪穴住居跡は台地南端で後期に属するものを1軒検出したのみであった。先の調査結果を合わせて考えると、台地の南端側に縄文時代の竪穴住居跡が分布し、台地東側に集石群が存在する状況がうかがわれる。集石には拳大の円礫を径50cm前後の環状に配する特徴的なものも存在している。

一方、台地北西側では台地最高位部とその東南の緩斜面および台地基部側の緩斜面に焼土遺構、土坑、集石が散在している。

平安時代の遺構は、台地南東部で竪穴住居跡を主体にかなりの密度で分布している。これに対し台地北西部では明確な遺構は検出されず、これらの地域は該期の遺跡の周辺部に相当すると考えられる。

(3)　遺　物

縄文土器は台地南東部では前期の円筒下層d式土器が主体を占め、このほかに若干の後期前半の土器が出土している。一方、台地北西部では中期末～後期前半の土器が顕著であり、前者とはその主体となる時期が異なる。

弥生土器も両地域から僅かに検出されているが、今回の調査では明確な出土層位はとらえられていない。

土師器は平安時代の遺構が集中する台地南東部からの出土が多く、北西部では乏しい。

以上の土器のほか、石鏃、磨製石斧、敲石など若干の石器や鉄滓が出土している。

8　範囲・時代・性格

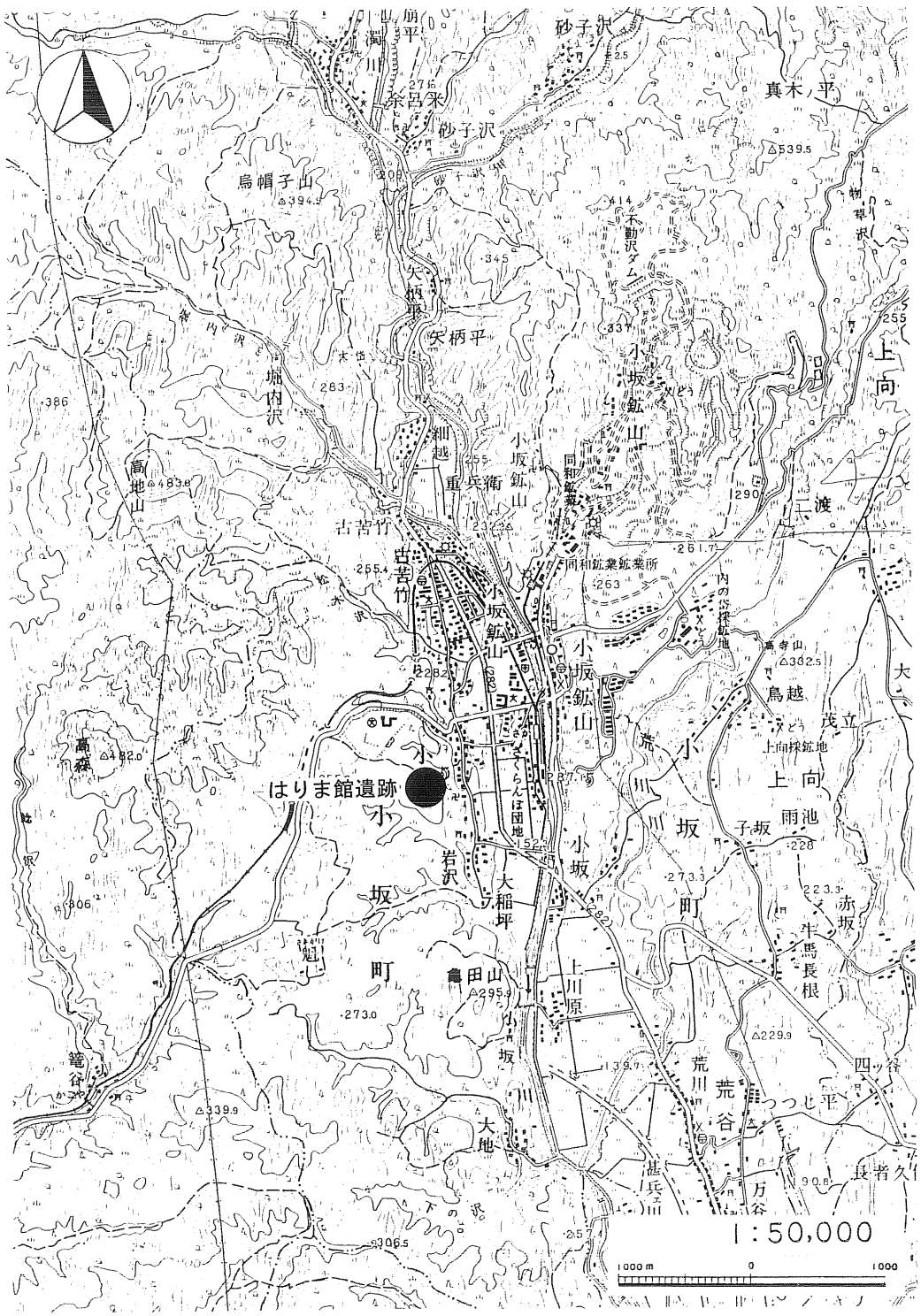
本遺跡の今回の調査地内での範囲は東北縦貫自動車道を挟んで大きくはA～D区の4地点に及んでいる。

A区は舌状台地南東側の平坦部を中心とする範囲である。本区には縄文時代および平安時代の集落が重複して存在するものとみられ、北端の斜面部は集落の周辺部に当たり、相対的に遺構・遺物の密度は低いものと想定できる。

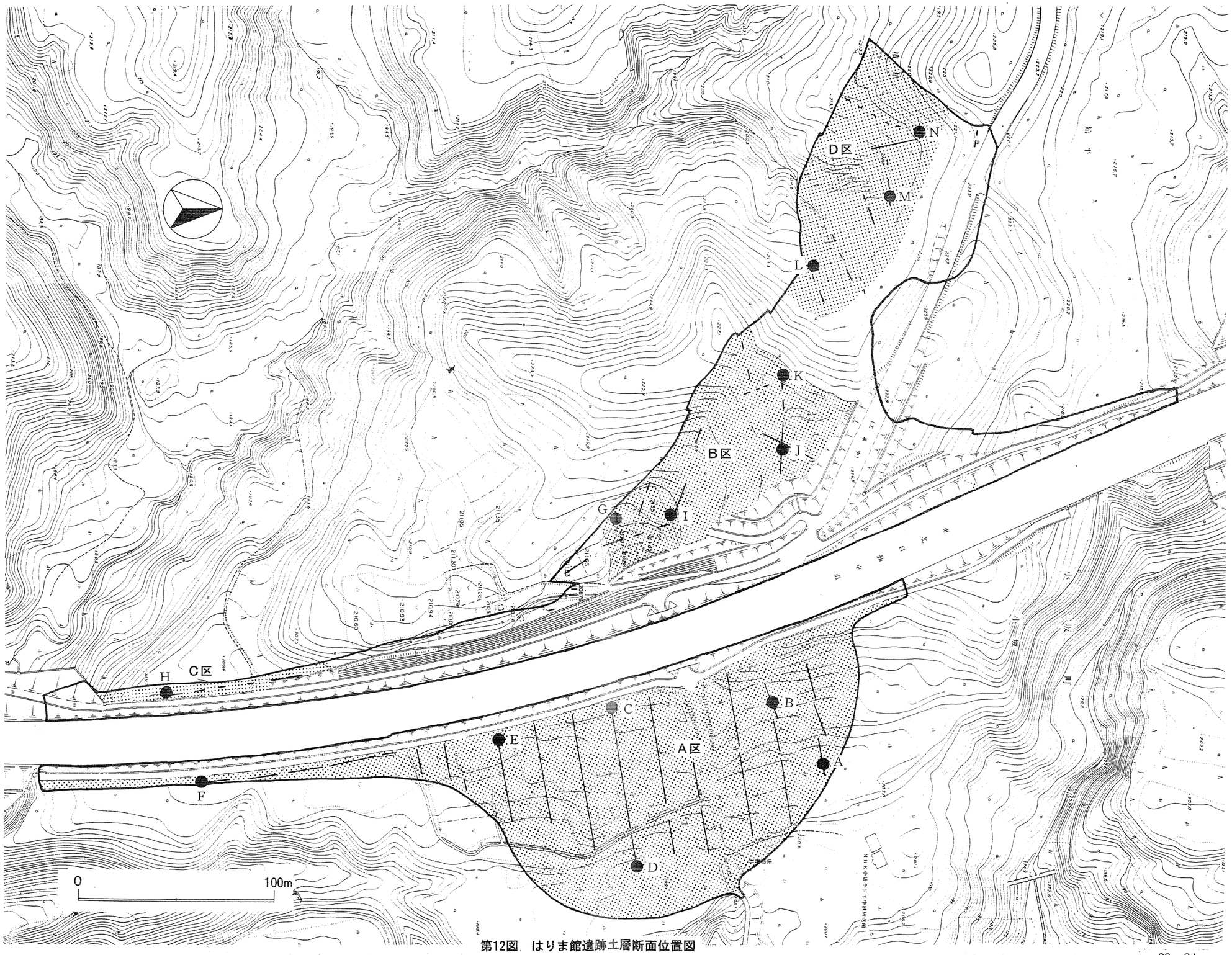
B区は台地中央の最高位部とその南西側の斜面とを含む範囲で、主として縄文時代の中～小規模の集落遺跡の存在が推定される。

C区は東北縦貫自動車道西沿いの南端部で、A区の平坦部と一連の縄文時代および平安時代の遺構が密に存在する地区である。

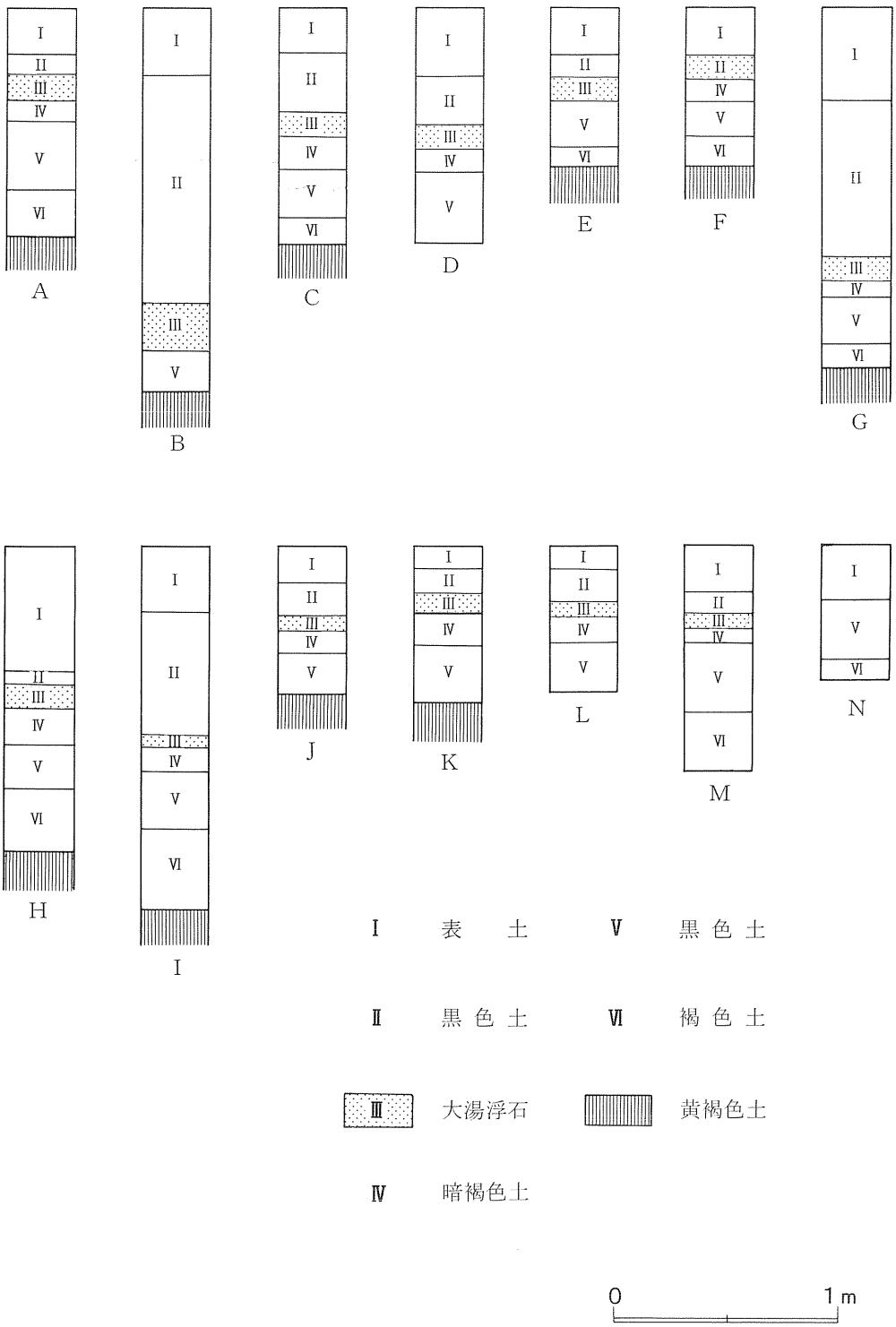
D区はB区の北西の緩斜面で、縄文時代の集落跡とみられるが、その性格は明確ではない。



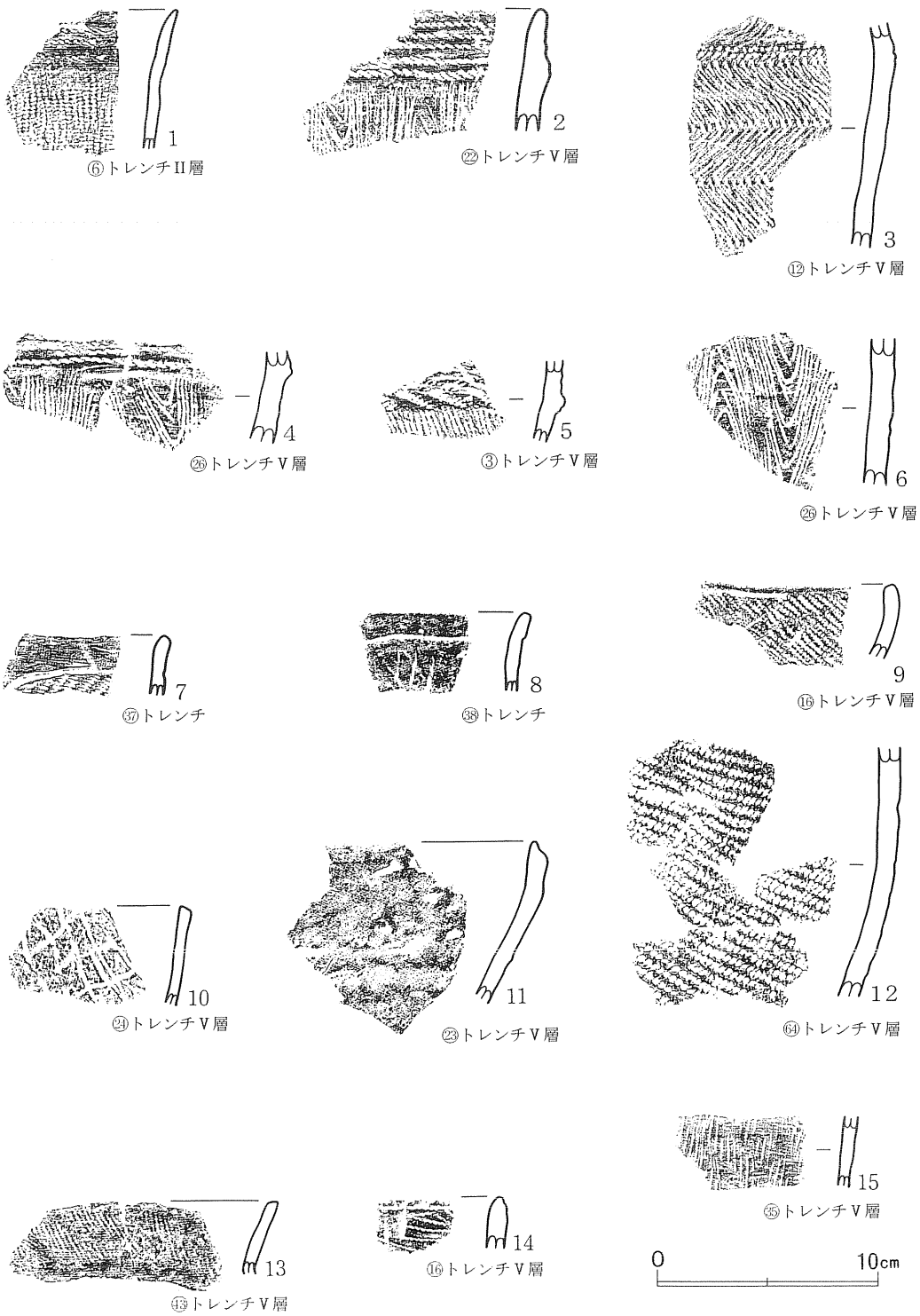
第11図　はりま館遺跡位置図



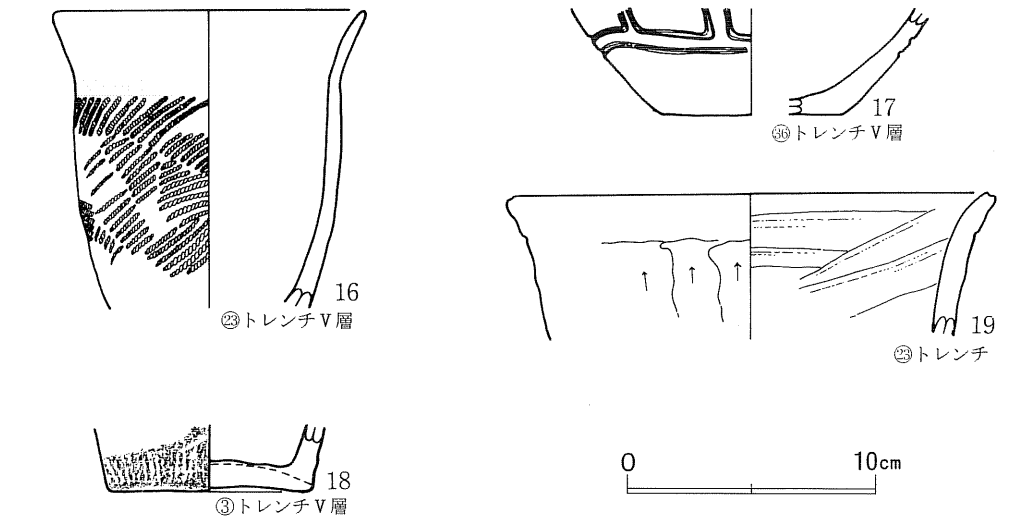
第12図　はりま館遺跡土層断面位置図



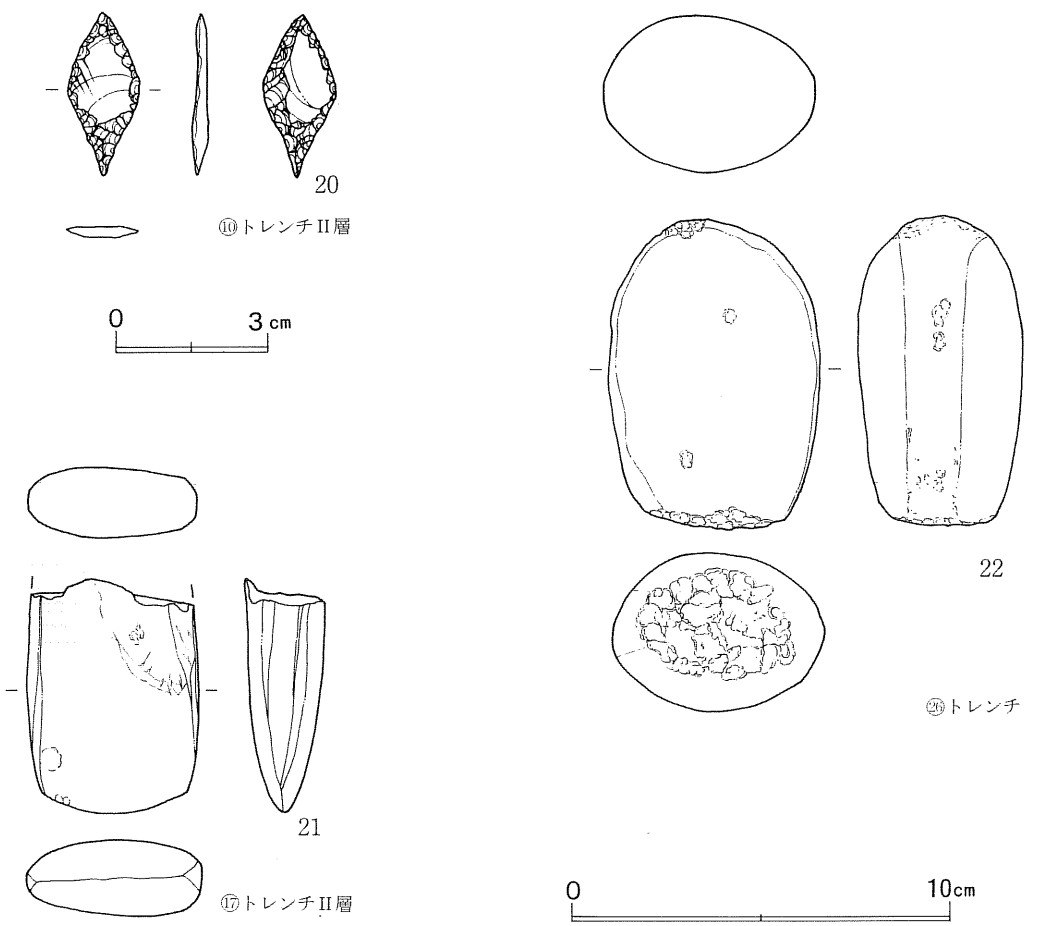
第13図　はりま館遺跡トレンチ土層柱状図



第14図　はりま館遺跡　出土遺物



第15図　はりま館遺跡　出土遺物

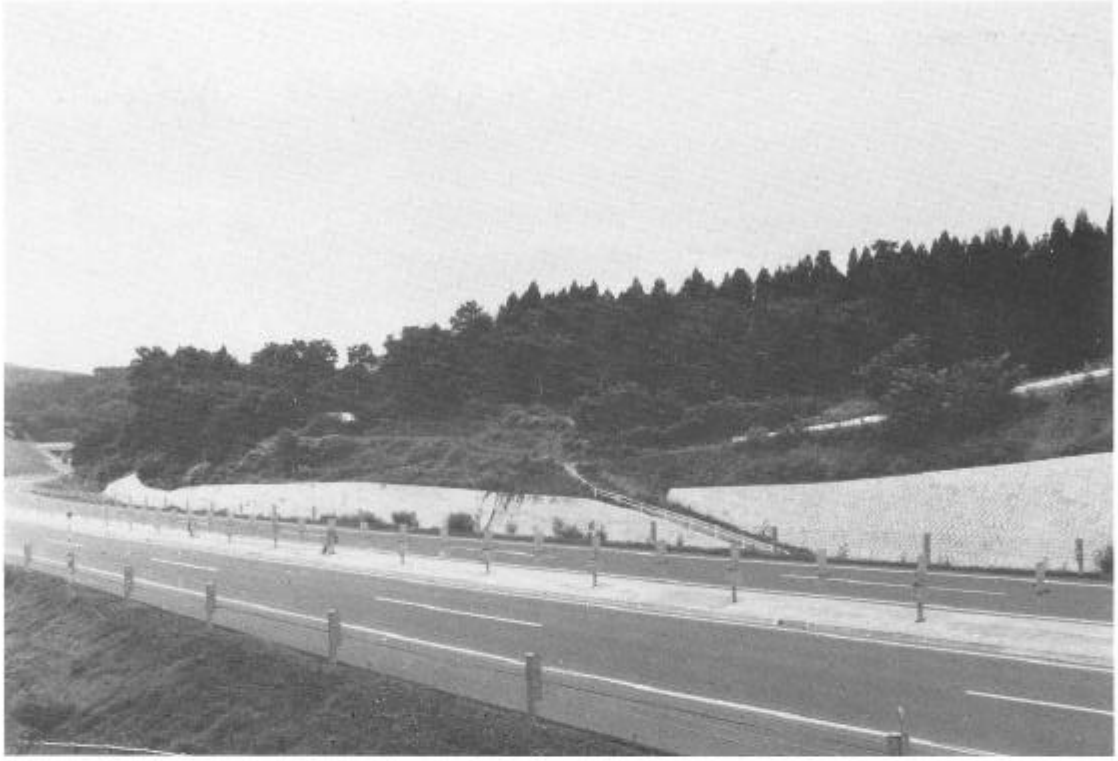


第16図　はりま館遺跡　出土遺物

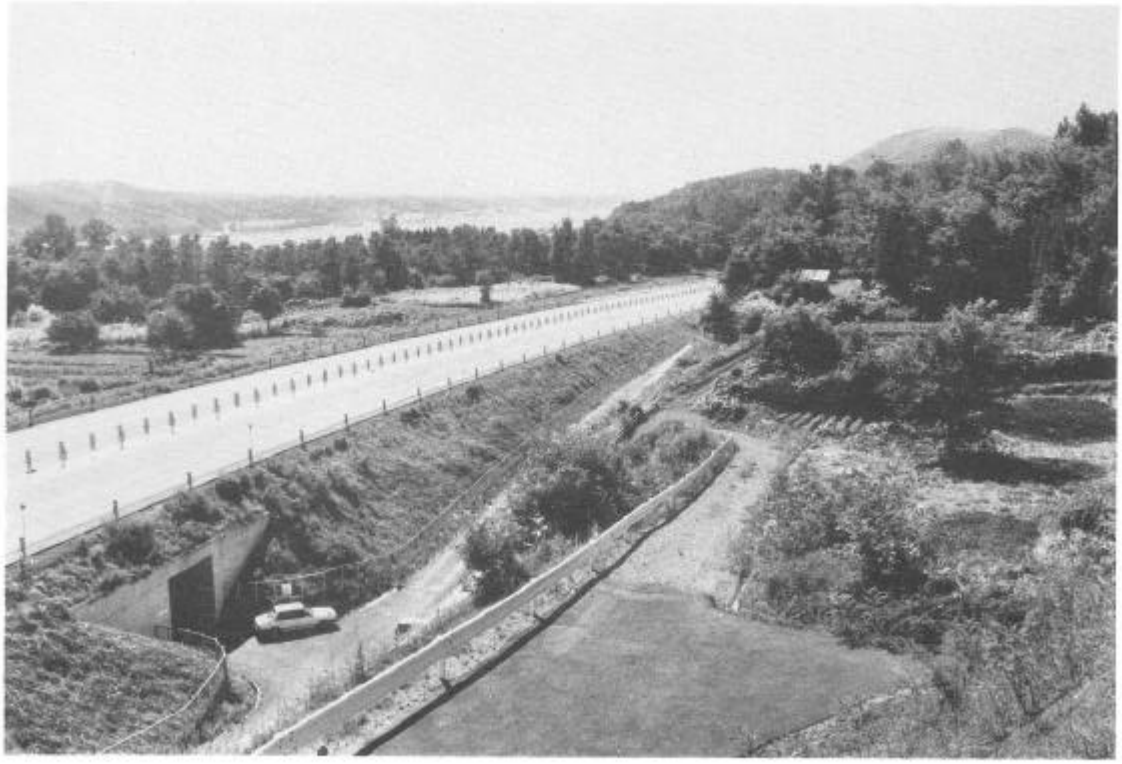
図版6

はりま館遺跡　A区遠景　（北西►南東）

はりま館遺跡　A区遠景　（西►東）

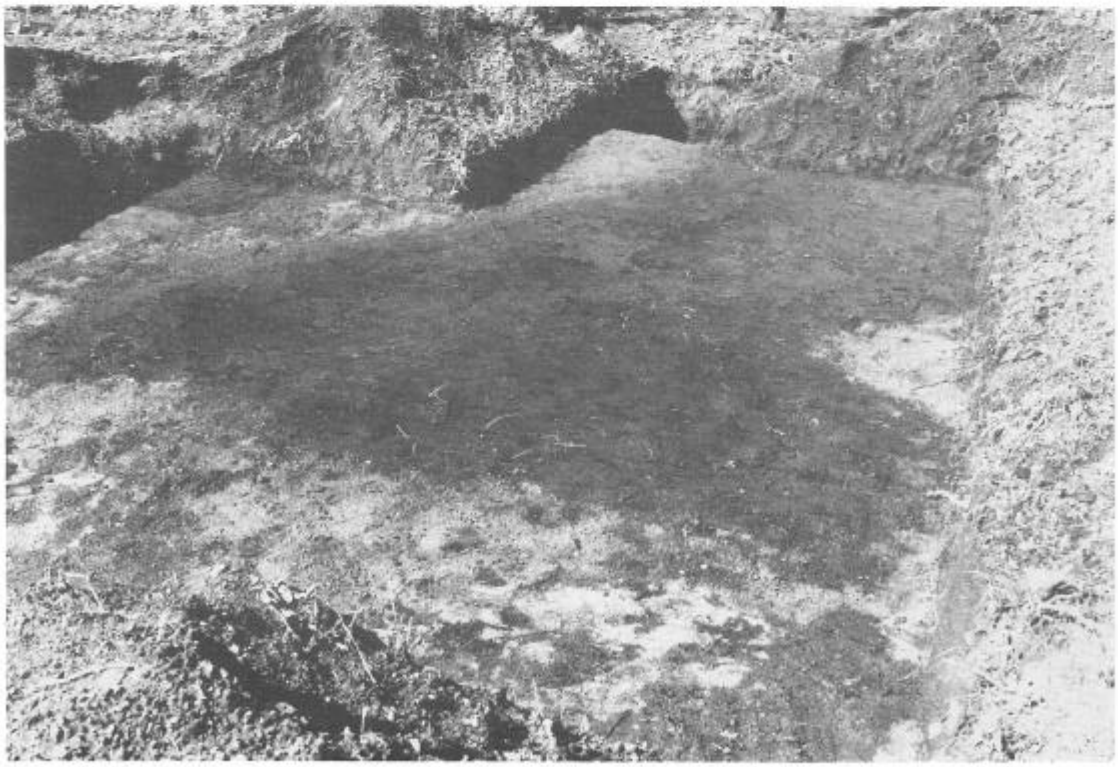


はりま館遺跡　B区(中央)C区(左側)　(北東►南西)

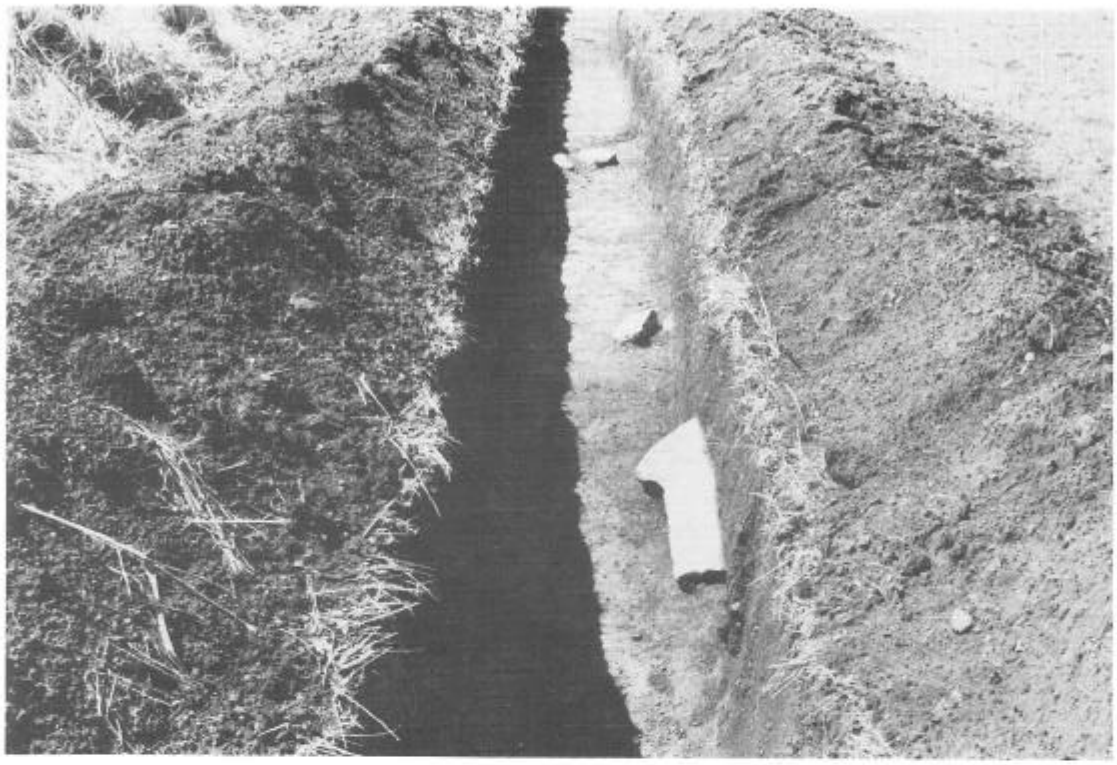


はりま館遺跡　A区(左側)B区(右側)　(北西►南東)

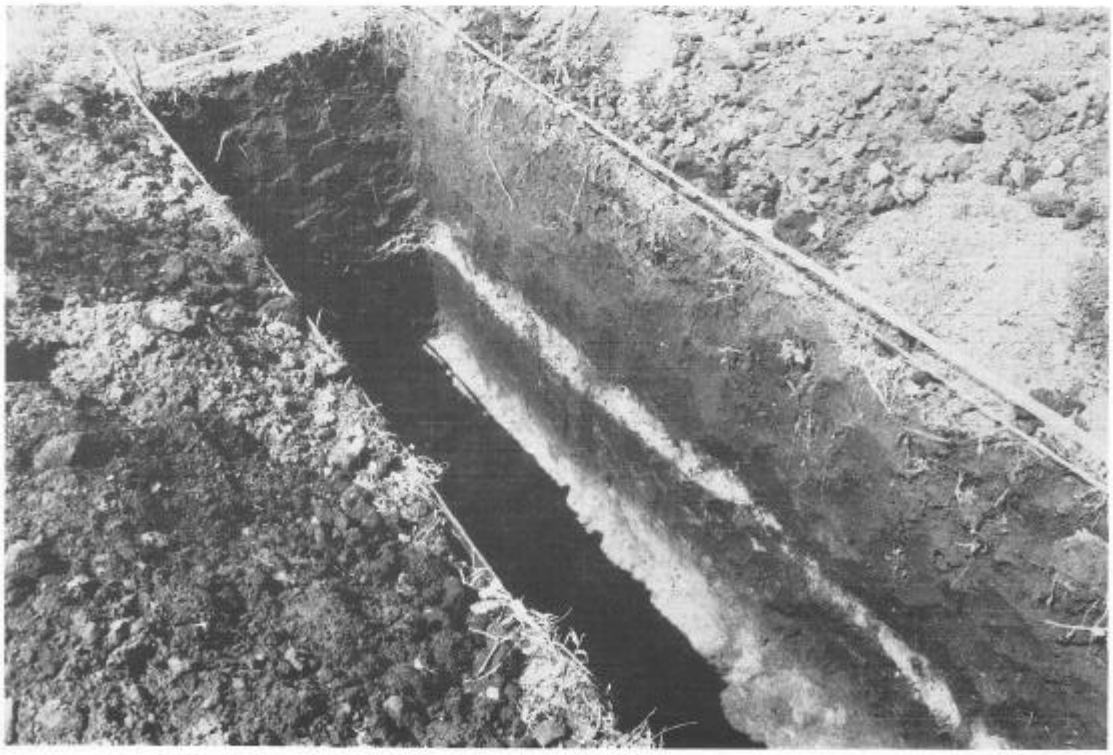
はりま館遺跡　⑬トレンチ　（東►西）



はりま館遺跡　⑥トレンチ・Ⅲ層上面検出竪穴住居跡　（東►西）

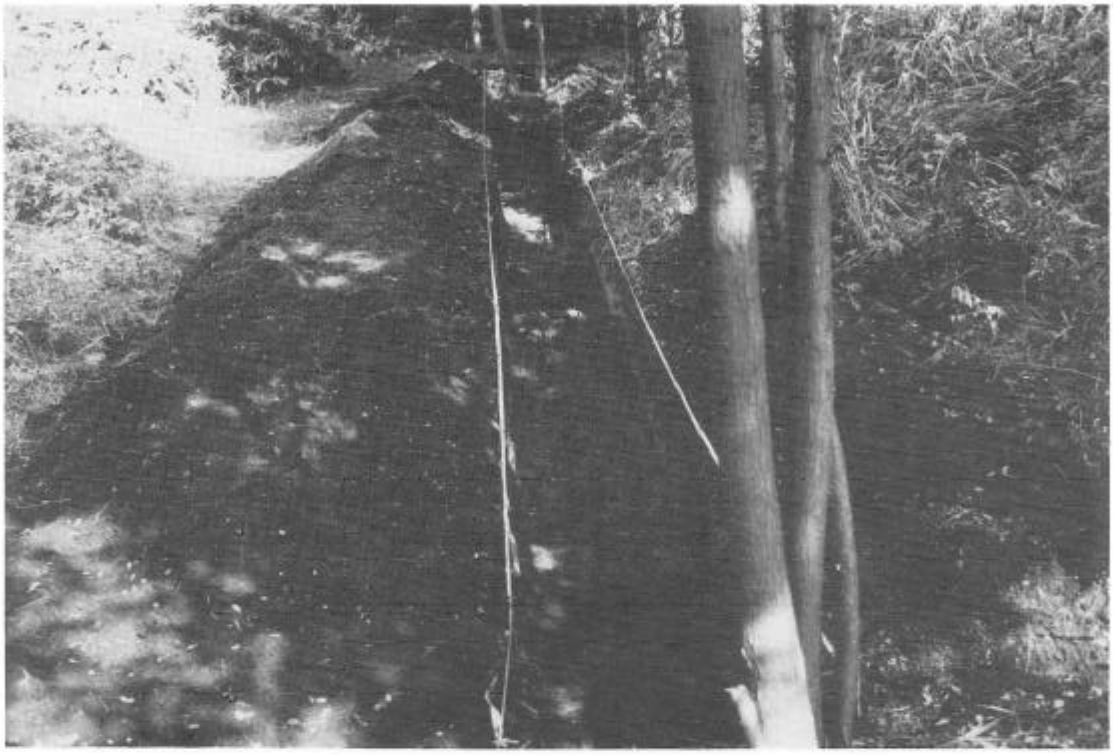


はりま館遺跡　⑪トレンチ・Ⅵ層検出礫　（東►西）



はりま館遺跡　⑪トレンチ・土層　（南東►北西）

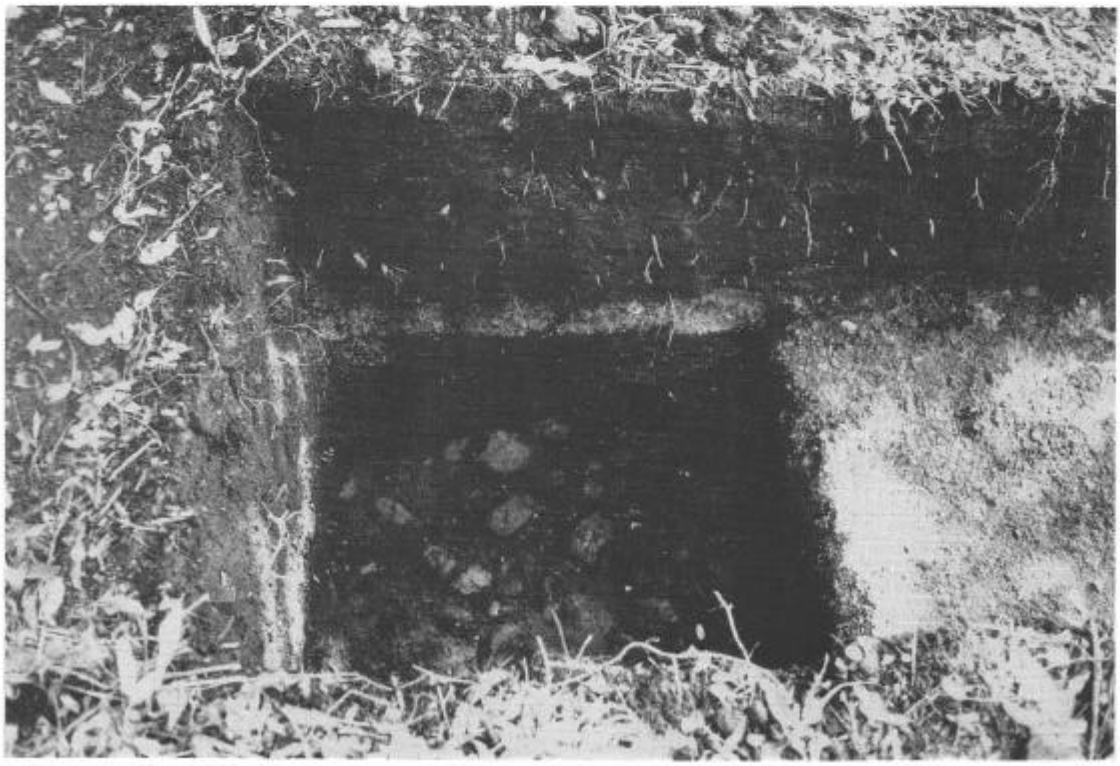
図版10



はりま館遺跡　⑫トレンチ・Ⅲ層上面検出竪穴住居跡(手前)　(西►東)

はりま館遺跡　⑫トレンチ・Ⅴ層検出集石　(北►南)

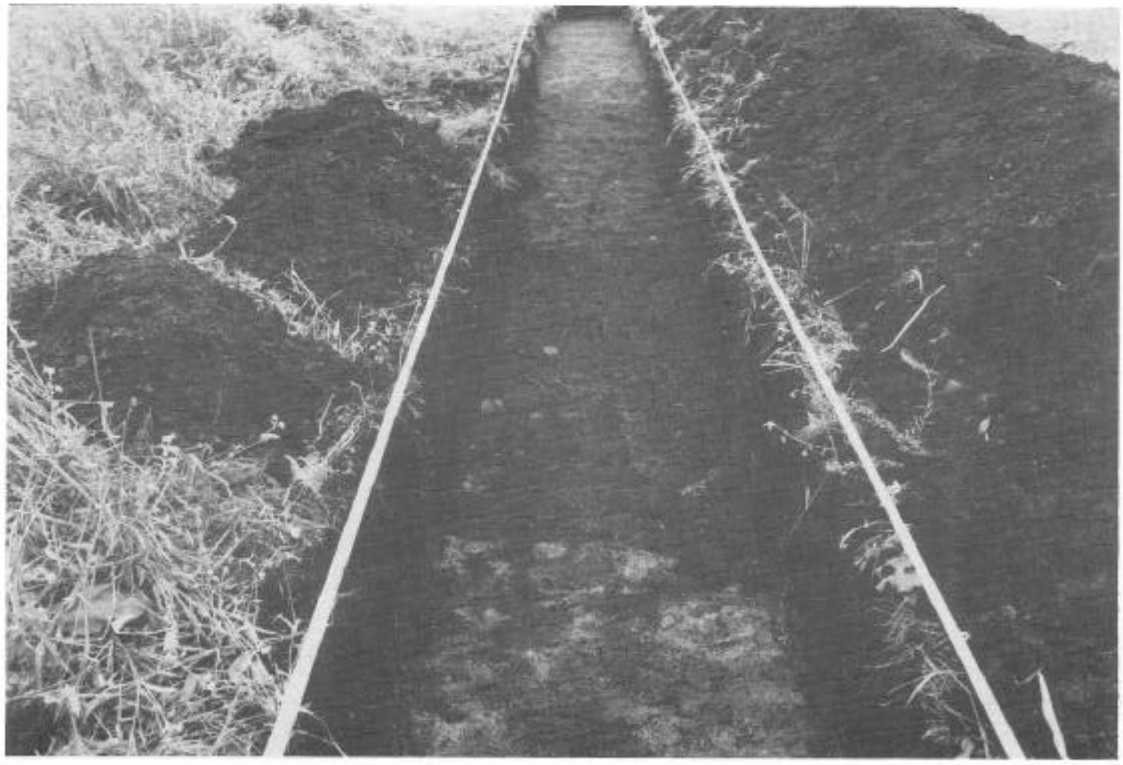
はりま館遺跡　⑬トレンチ・Ⅲ層上面の遺構確認状況　（西►東）



はりま館遺跡　⑭トレンチ・Ⅵ層上面検出集石　（北►南）

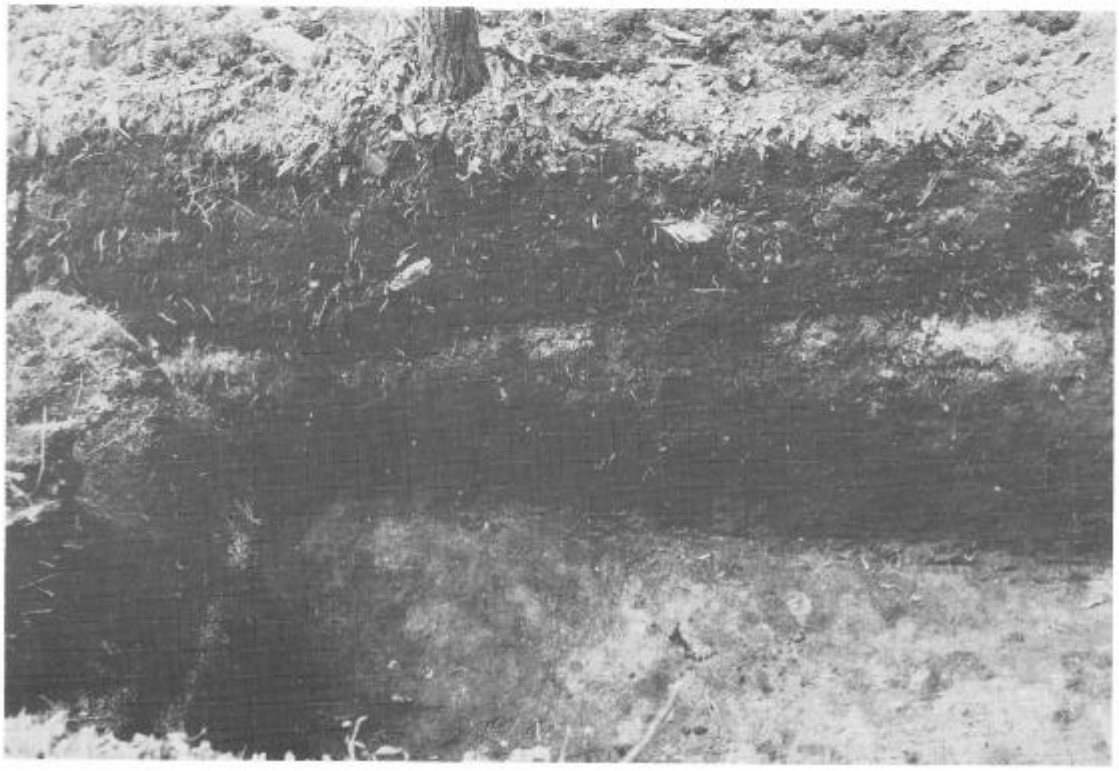
図版12

はりま館遺跡　⑮トレンチ・Ⅲ層上面検出竪穴住居跡　（東►西）



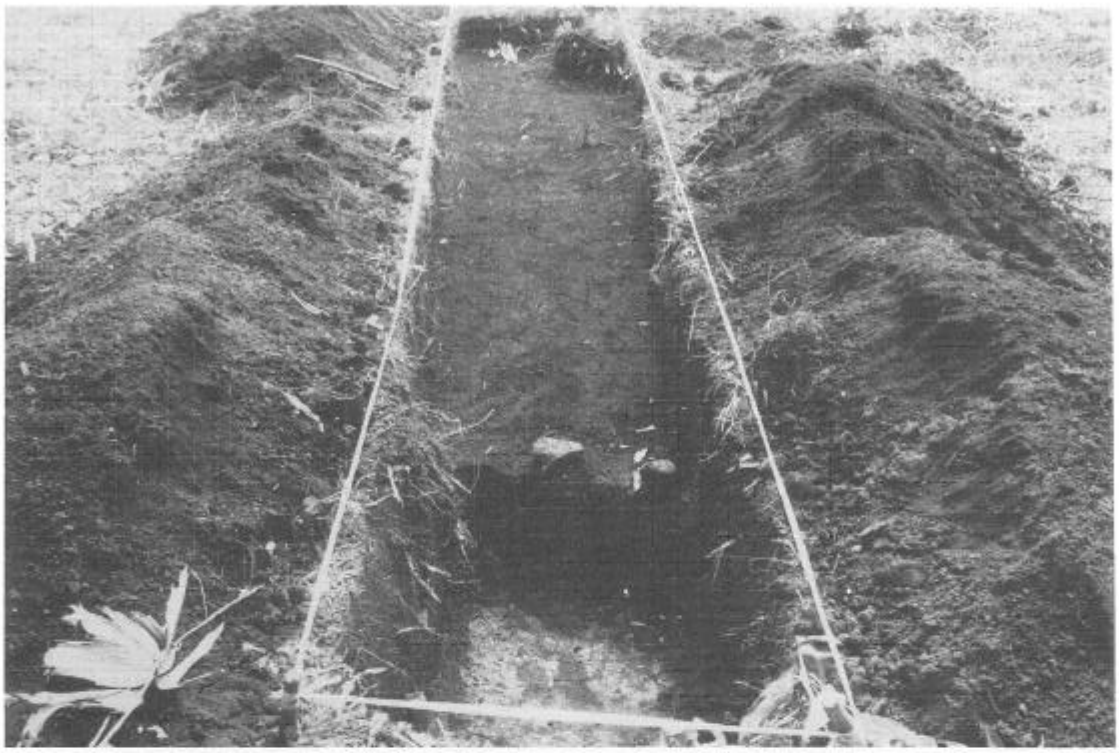
はりま館遺跡　㉒トレンチ・Ⅴ層上面検出竪穴住居跡　（北►南）

はりま館遺跡　㉓トレンチ・Ⅵ層上面検出竪穴住居跡　（北►南）

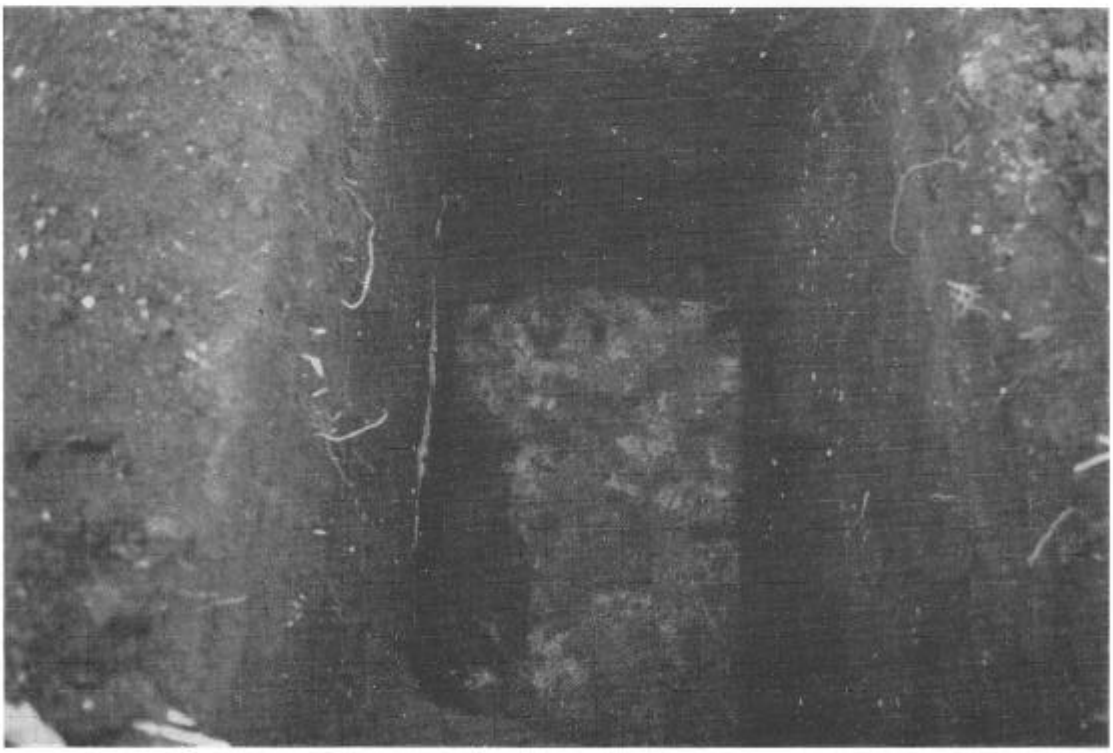


はりま館遺跡　㉟トレンチ・Ⅵ層上面検出焼土遺構（中央）（西►東）

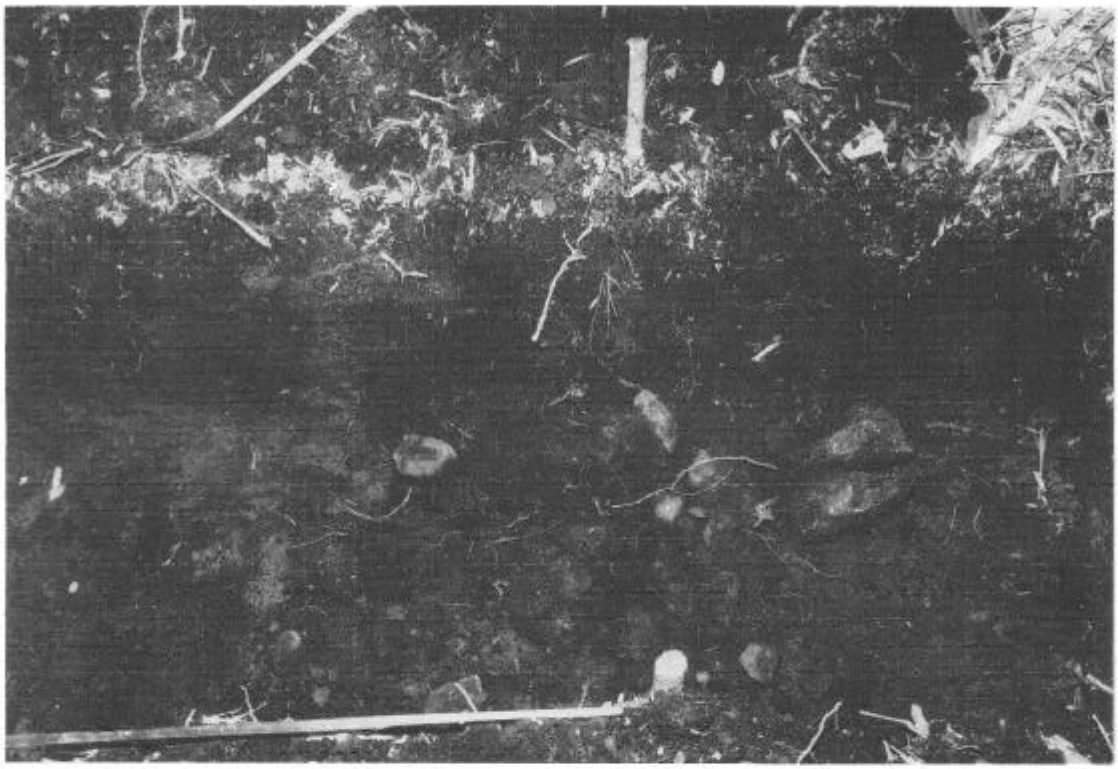
図版14



はりま館遺跡　㊷トレンチ・Ⅴ層検出集石　（西►東）



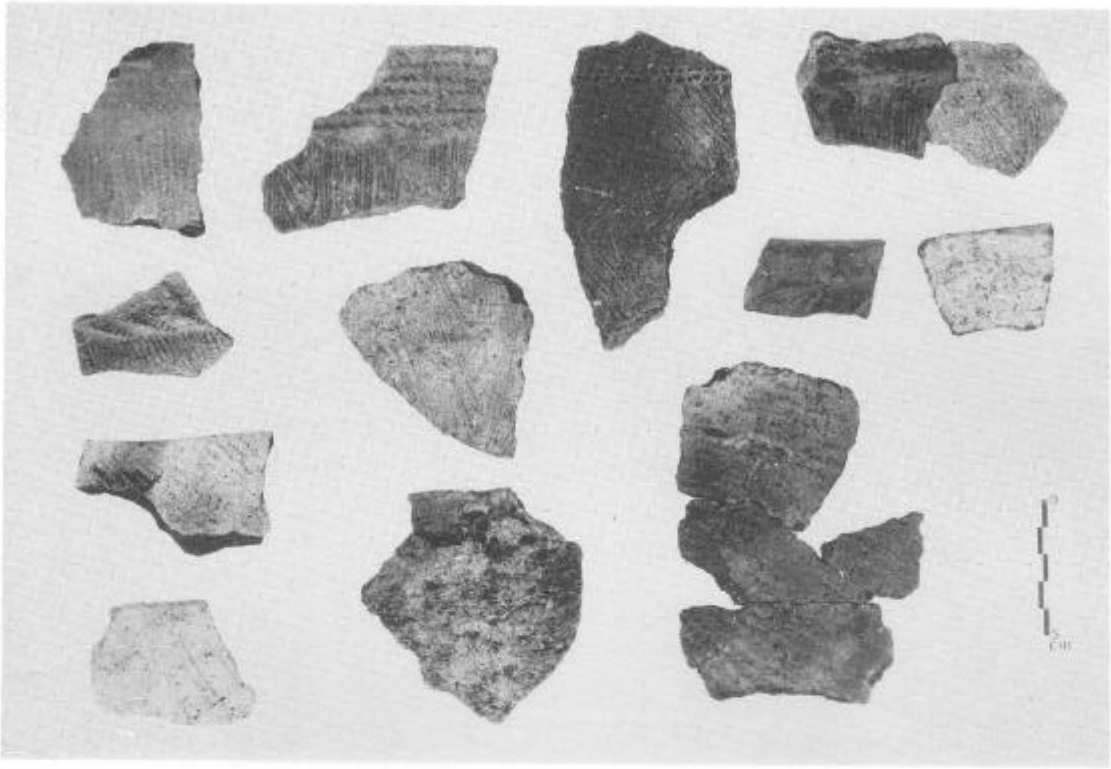
はりま館遺跡　㊻トレンチ・Ⅵ層上面検出土坑　（東►西）



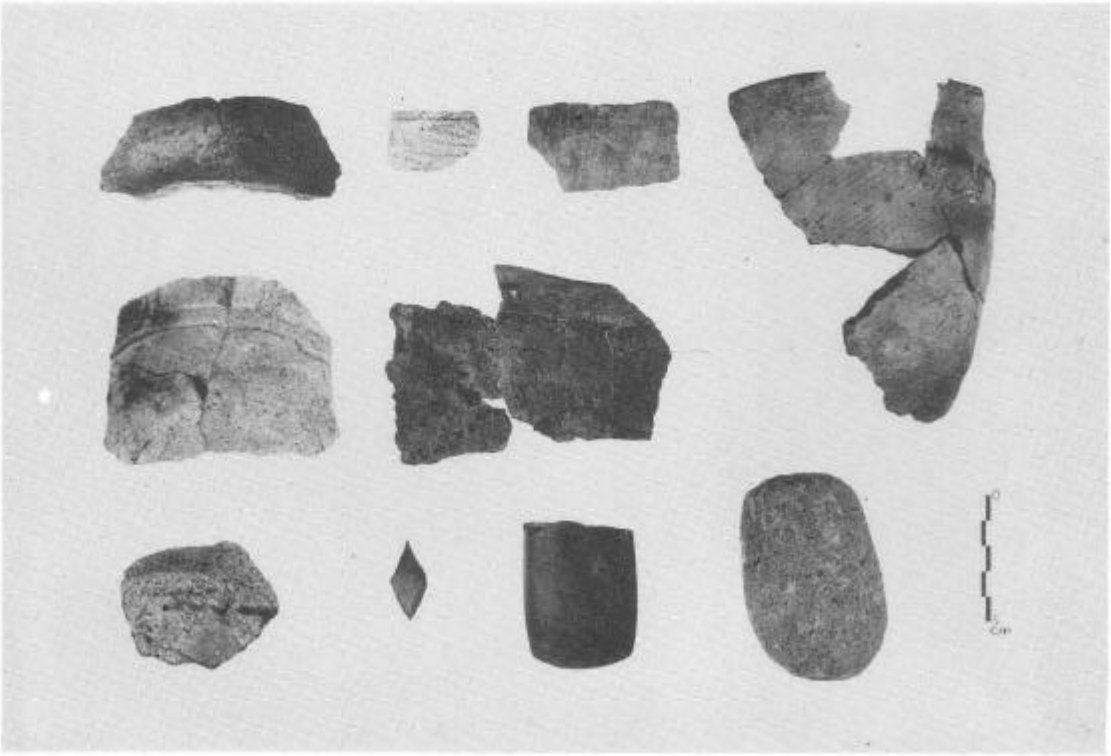
はりま館遺跡　㊻トレンチ・Ⅵ層上面検出集石　（東►西）

はりま館遺跡　㊼トレンチ・Ⅵ層上面検出集石　（東►西）

図版16



はりま館遺跡　出土遺物



はりま館遺跡　出土遺物

4　西山地区農免農道整備事業

用野目川向Ⅲ遺跡（ようのめかわむかい）

1　所在地　　鹿角市花輪字用野目川向116-6他

2　工事区域内遺跡面積　　1,300㎡

3　調査期間　　昭和62年９月１日、３日～４日

4　調査担当者　　谷地　薫

5　遺跡の立地と現況

本遺跡は花輪盆地の南西部にある。花輪盆地南半部では、盆地西端を北流する米代川が盆地とその西側に接する高森山地を画しているが、本遺跡は高森山地の東端、米代川左岸の標高190～210ｍのやや起伏のある丘陵上に立地している。南北に延びる丘陵の尾根の上部の南西斜面が遺跡である。現況は畑地、荒地である。

6　調査の概要

(1)　遺跡の概観

丘陵尾根の南西斜面からは広い範囲で縄文土器、弥生土器、土師器が表面採集される。今回の範囲確認調査ではこの範囲の一部を試掘したが、弥生時代の土坑や平安時代の竪穴住居跡が検出された。したがって本遺跡は平安時代の集落跡である他、縄文時代や弥生時代の遺構・遺物も包蔵されている複合遺跡である。

(2)　調査の方法

現在の農道とその法面を除いて、工事計画の中心線に平行に幅１ｍのトレンチを４本、中心線に直交するトレンチを８本設定し、合計210㎡の試掘を行った。各試掘地点における出土遺物、遺構、土層を観察し、その一部は写真撮影を行った。

7　調査の記録

(1)　基本土層

本遺跡の基本土層は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土。層厚は20～40cm。

Ⅱ層：大湯浮石層。層厚は５～10cm。中央部で部分的に残存する。

Ⅲ層：黒色土層。層厚は10～30cm。北半部では、この層を掘り込んで平安時代の竪穴住居跡が構築されている。南半部ではこの層まで削平を受けており、部分的に残存する。

Ⅳ層：暗褐色土層。層厚は30～40cm。縄文時代、弥生時代の遺物包含層である。

Ⅴ層：褐色土層。地山の黄褐色土層への漸移層である。

(2) 遺　構

今回検出した遺構は以下のとおりである。

弥生時代の土坑	1	基
平安時代の竪穴住居跡	2	軒
時期不明の土坑	6	基

土坑は南半部の比較的平担な部分に集中する。時期不明の土坑のうち円形のもの５基は、周囲から縄文が施文された土器の細片が出土しているので縄文時代または弥生時代のものと考えられる。平安時代の竪穴住居跡のうち北半部で検出されたものは、埋土中に焼土や炭化物が多く含まれており、焼失住居跡の可能性がある。

(3) 遺　物

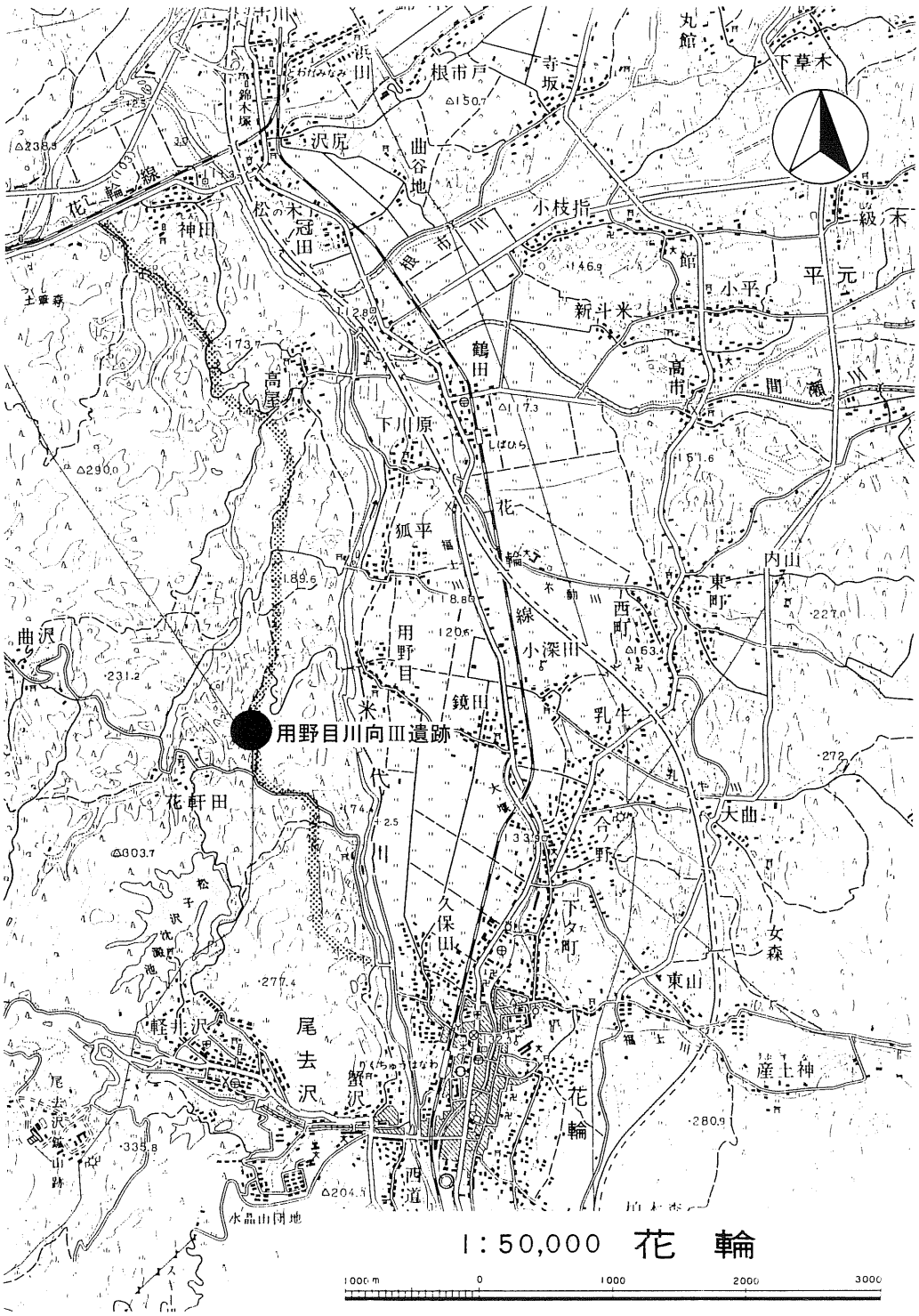
竪穴住居跡の埋土中及び周辺からは土師器、須恵器が出土した。弥生土器はNo. 124中心杭周辺の土坑の埋土上面からまとまって出土した他、中央部付近で細片が表土中と第Ⅳ層中から出土した。縄文のみが施文された土器の細片は主に南半部の表土中と第Ⅳ層中から出土した。

第19図１、２、８、９は同一個体である。口縁部に平行沈線を主体とする文様が描かれ、口縁の内面にも１条の沈線がめぐる。３は細い沈線で変形工字文が描かれる。４は波状口縁で口縁部に平行沈線による文様が描かれる。５、10～12は細かい撚糸文が施文された土器である。以上は弥生時代の土器である。７はＲＬの縄文が施文された深鉢形土器である。13はＲＬＲの複節の縄文を施文し、浅く太目の沈線で曲線の区画を描いてその中を磨消している。これらは縄文土器である。

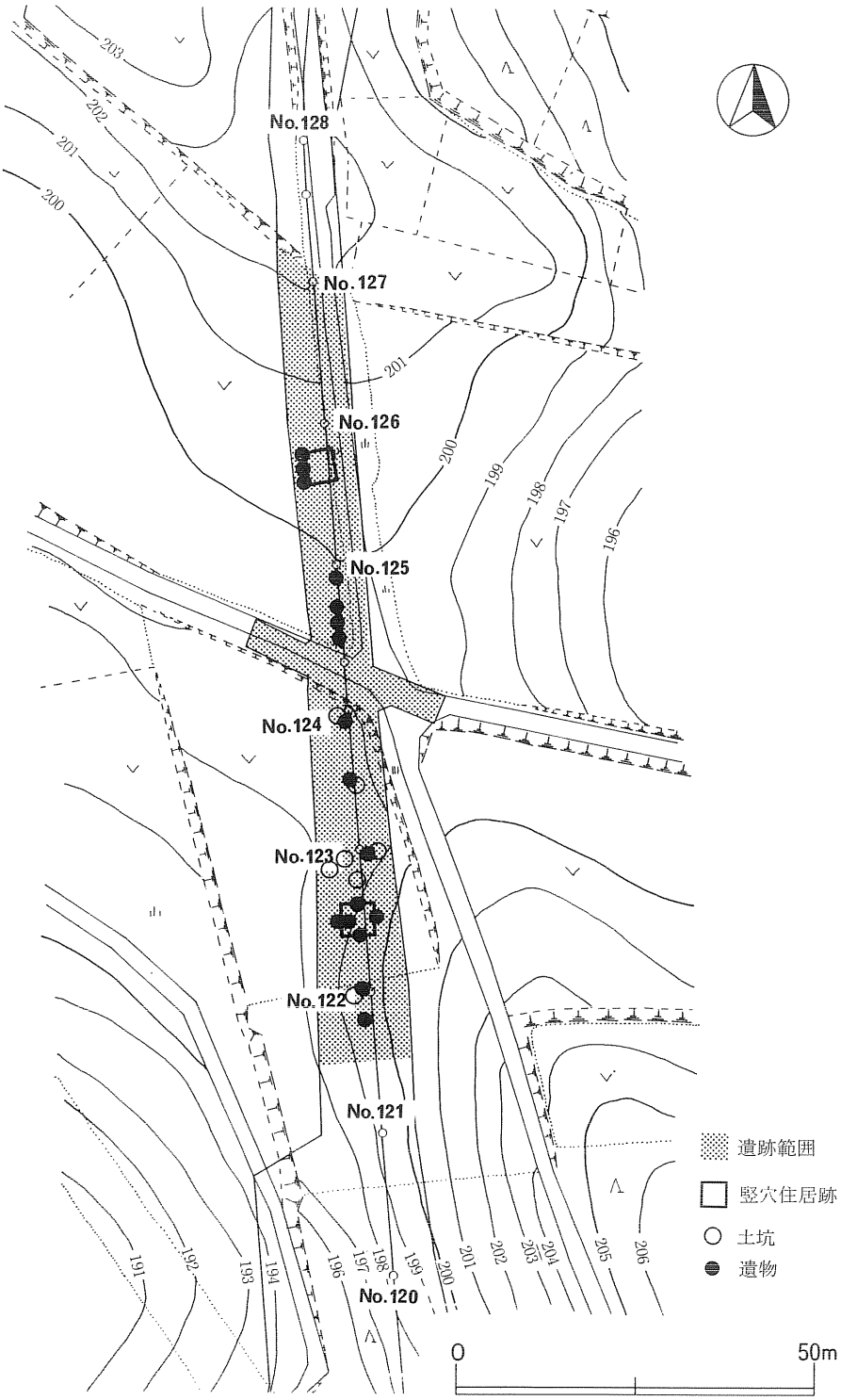
土師器は坏、甕、須恵器は壺の破片が出土した。第19図14～16は土師器坏である。14は底部が回転糸切りである。内面を黒色処理している。口径13.4cm、底径6.7cm、器高5.0cm～5.5cmを計る。17、19、21は土師器甕である。17は外面にタタキ目がある。19、21は外面をヘラケズリ調整している。18、20は須恵器壺である。20は胴部下半をヘラケズリ調整し、内面には粘土紐の巻き上げ痕が残る。

8　範囲・時代・性格

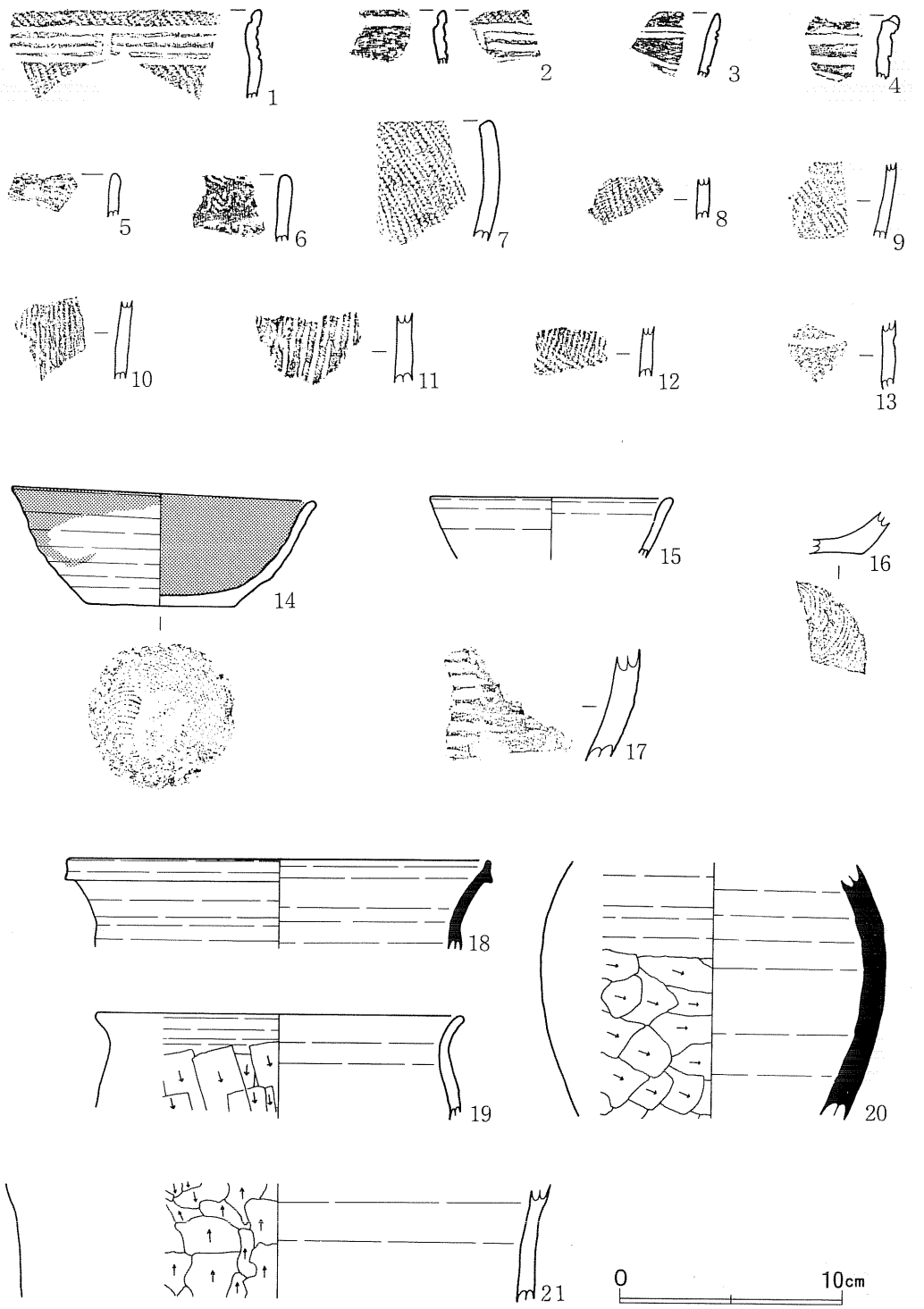
平安時代の集落跡は丘陵の南西斜面全面に広がっていると考えられる。今回の調査対象範囲は、本遺跡の東端部分である。工事計画区域内の遺跡範囲はNo. 127中心杭付近より南側約110ｍの部分の計画路線幅内である。その北半部は第Ⅲ層上面が平安時代の遺構面で、竪穴住居跡が存在する。第Ⅳ層は弥生時代、縄文時代の文化層で、遺物が包含されている他、土坑等の遺構の存在も考えられる。南半部は既に第Ⅲ層まで削平されており、残存する第Ⅳ層の上面で平安時代、弥生時代、縄文時代の遺構が検出される。



第17図　用野目川向Ⅲ遺跡位置図

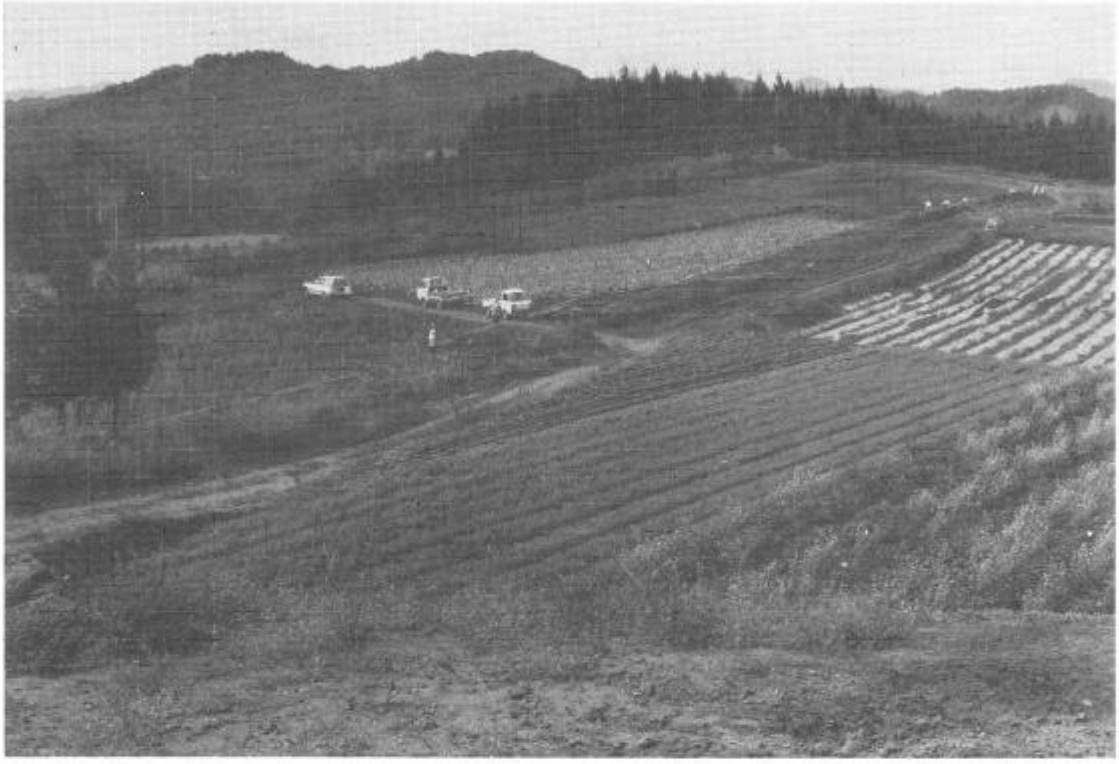


第18図　用野目川向Ⅲ遺跡工事区域内遺跡範囲図



第19図　用野目川向Ⅲ遺跡　出土遺物

図版17



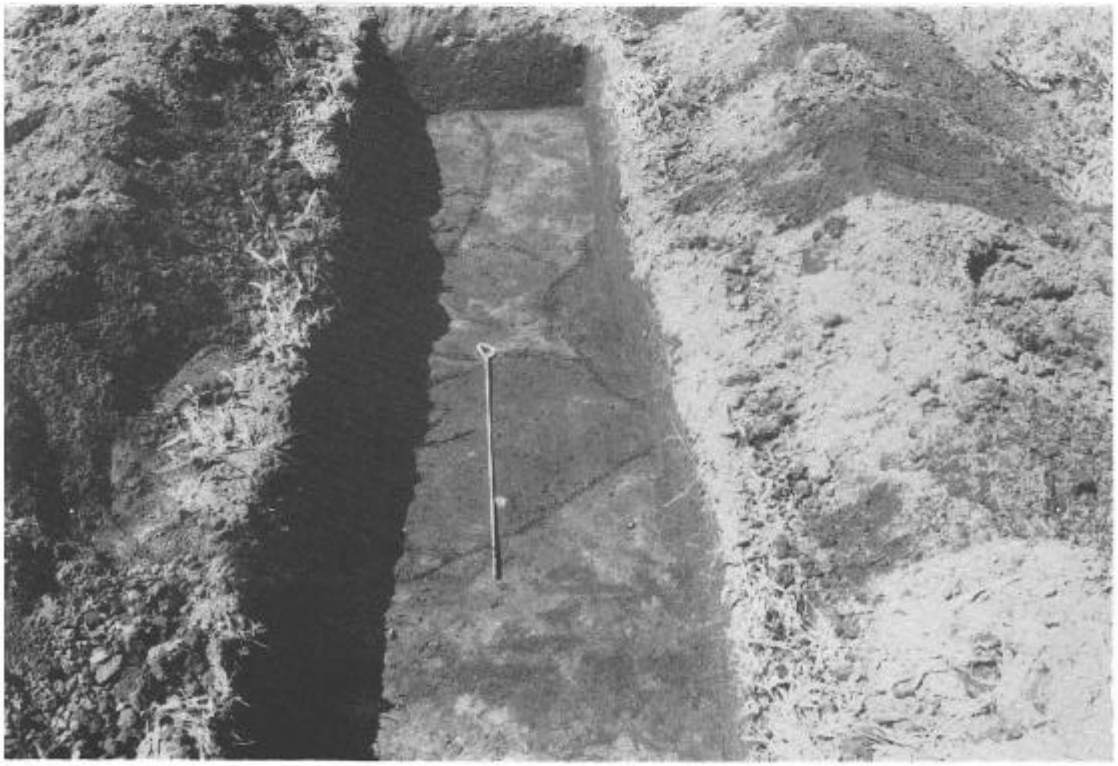
用野目川向Ⅲ遺跡　遺跡全景　（南東►北西）

用野目川向Ⅲ遺跡　北半部の現況　（北►南）

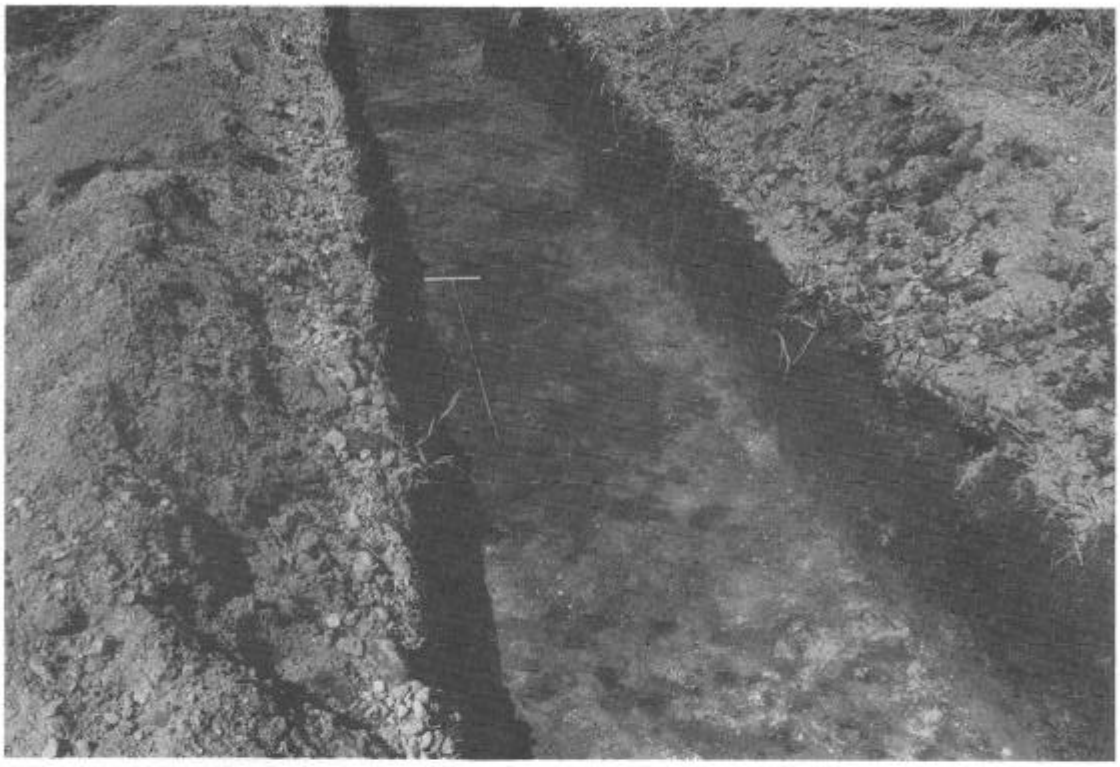
用野目川向Ⅲ遺跡　No.126中心杭付近の竪穴住居跡確認状況　（北►南）

用野目川向Ⅲ遺跡　南半部調査トレンチ　（南►北）

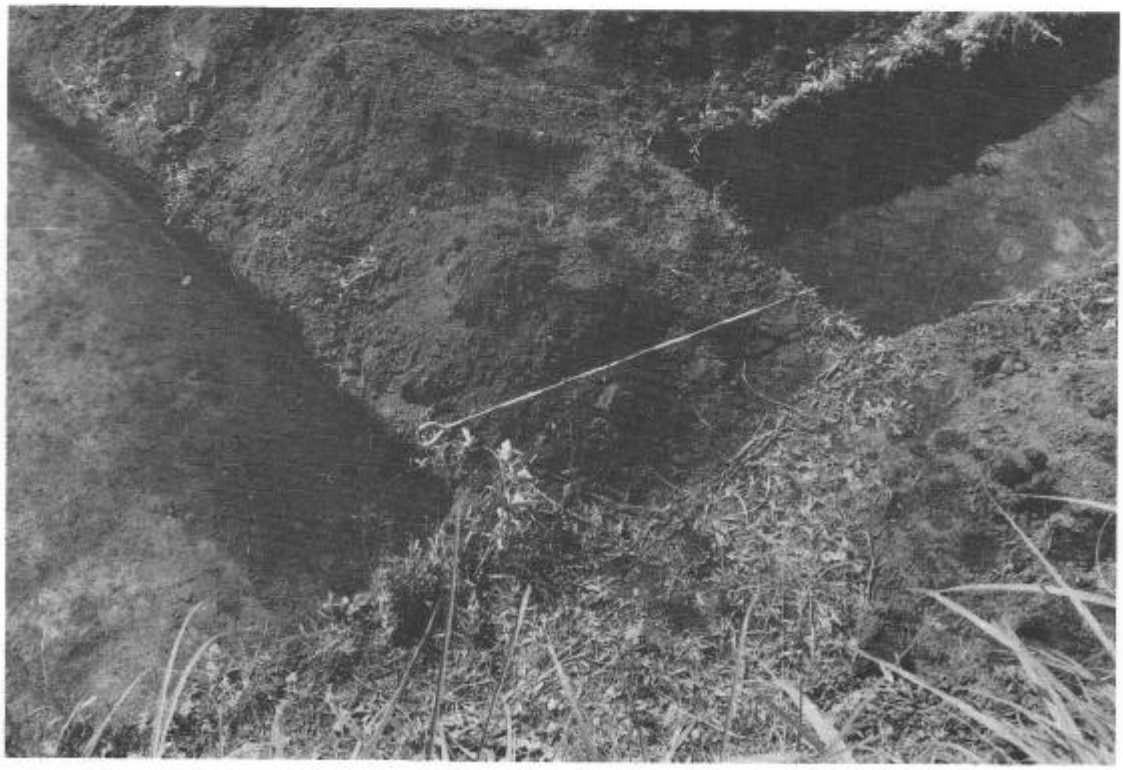
用野目川向Ⅲ遺跡　No.122中心杭付近の土坑確認状況　（西►東）



用野目川向Ⅲ遺跡　No.123中心杭付近の土坑確認状況　（東►西）

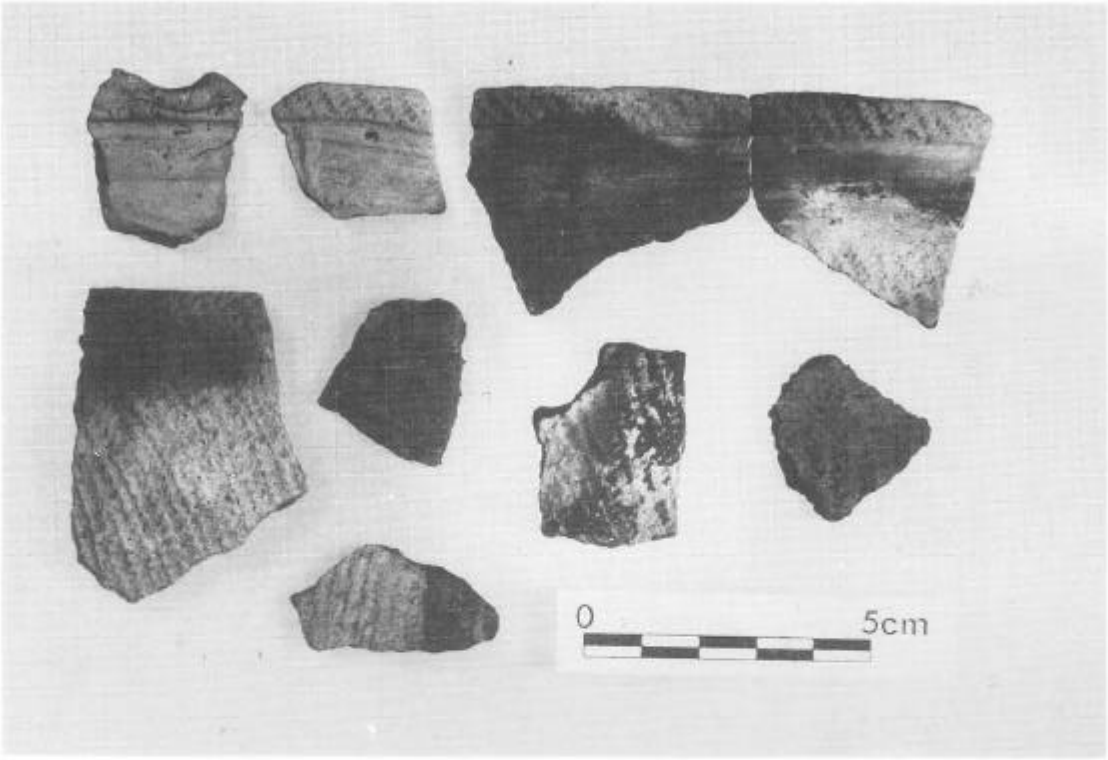


用野目川向Ⅲ遺跡　No.124とNo.124中心杭の中間の土坑確認状況　（南►北）

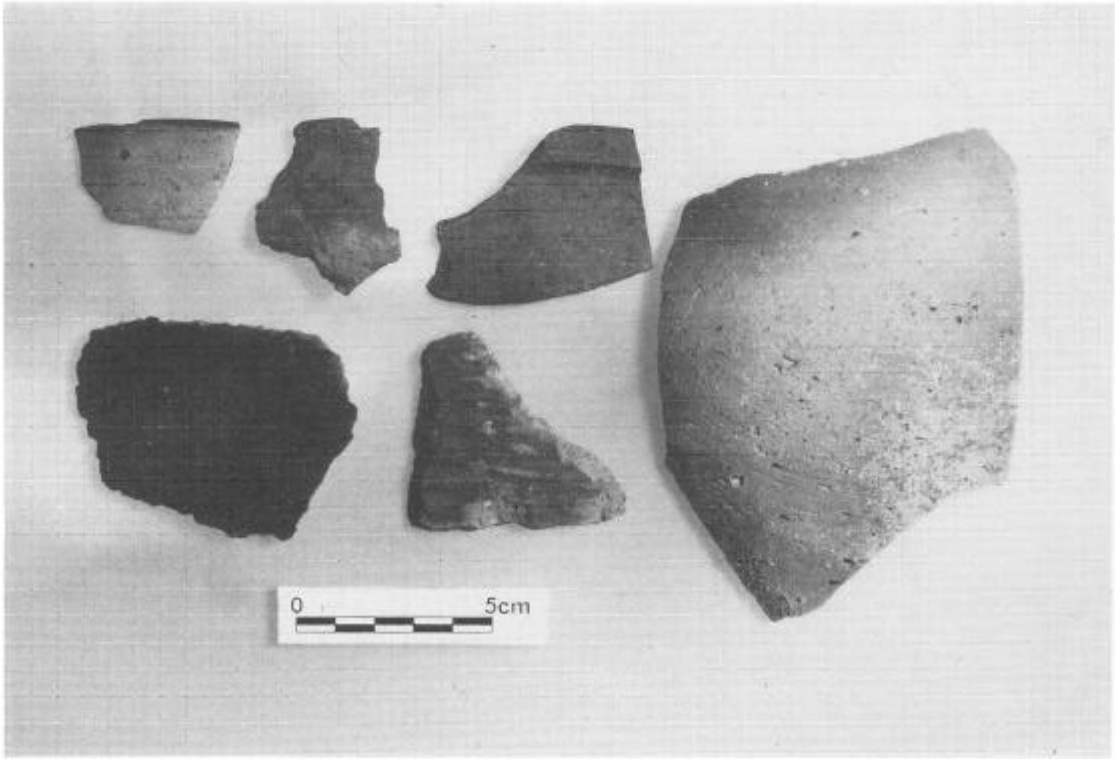


用野目川向Ⅲ遺跡　No.124中心杭付近の土坑確認状況　（北東►南西）

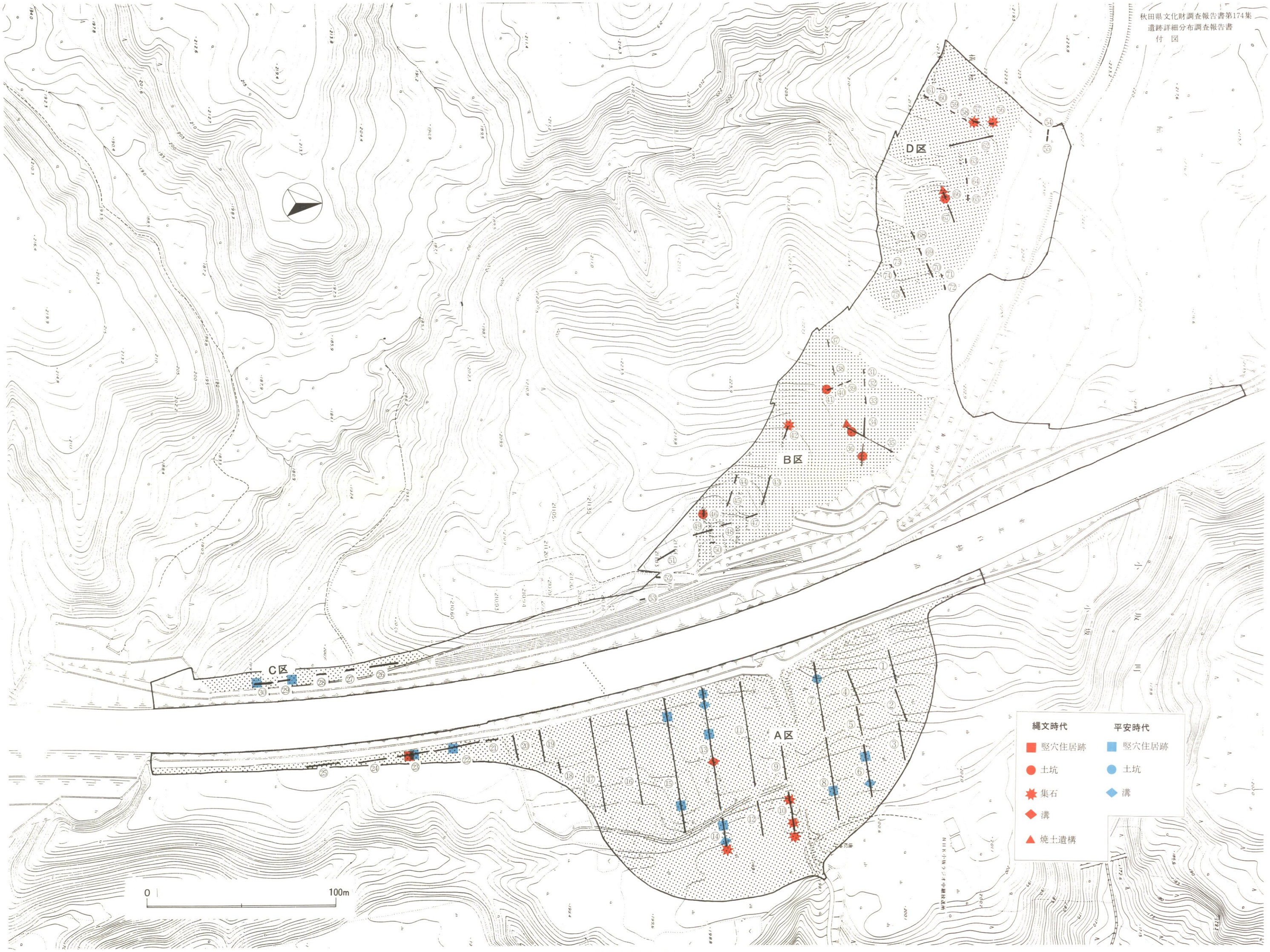
図版21



用野目川向Ⅲ遺跡　出土遺物　（縄文土器・弥生土器）



用野目川向Ⅲ遺跡　出土遺物　（土師器・須恵器）



はりま館遺跡遺構配置図